
恋詠花

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋詠花

【Nコード】

N0649BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

アイシャは大国トウルティエールの王妹で可憐な姫君。だが兄王にただならぬ憎しみを向けられて、王宮で非常に肩身の狭い思いをしていた。

そんな折、兄王から小国ハーメイの王に嫁げと命じられたアイシャはおとなしくそれに従う。しかし、そんな彼女を待っていたのは、手つかずのお飾りの王妃という屈辱的な仕打ちだった。それは彼女の出自にも関係していて……？

——これは後の世で吟遊詩人に詠われる二人の王と一人の姫君の恋

物語。

01 下賤の姫

——オルデリード大陸第二の大国、トゥルティエール。

この国はまだ二十歳そこそこの若い王が統治している。

名をルドガーと言い、典型的なトゥルティエール王族の特徴である白金の髪と青灰色の瞳をしていた。

そして、その彼にはこの国の王族ではあり得ない灰桜色の真っ直ぐな長い髪に胡桃色の瞳を持つ妹姫がいた。

「アイシャ様、陛下がお呼びでございます」

やや年かさの侍女であるライサが知らせてきたのを受けて、アイシャは少々慌てる。

兄王とは折り合いが悪く、普段アイシャは彼にないものとして扱われていた。

それが、今回の唐突な呼び出しだ。

ルドガーには意図があるのだろうか、アイシャはそれがなにかも想像がつかない。

「まあ、陛下がお呼びだなんてなにかしら……？　良いことであればいいのだけれど」

それでも久しぶりの兄王との対面にアイシャは心を浮き立たせていた。

ルドガーとの折り合いは悪いが、アイシャは決して兄王を嫌っているわけではなかった。

「アイシャ様、陛下の御前に出られるのですから、その前に髪を少し結いましょう」

「あ、そうね。衣装はこれでいいかしら？」

ライサの言葉にアイシャは素直に頷くと、自らを見下ろした。
今日のアイシャは象牙色のやや控えめな意匠のものを身につけていたが、これは髪型でそれなりに華やかになるだろう。

美しい灰桜色のアイシャの髪は結わずにいても充分見事ではあったのだが、ただでさえアイシャに厳しいルドガーの前に出るのにそれでは体裁が悪いだろうとライサは考えたのだ。

「はい、よろしいと思いますよ。それでは、姫様こちらへ」

ライサに導かれて、アイシャは衣装部屋の鏡台の前に座った。

ライサに髪を丁寧にブラシでかけられると、アイシャの髪はより美しい艶やかさを醸し出した。

「本当に素敵な御髪ですわ、アイシャ様」

「……ありがとう」

大事にしている髪をライサに褒められたのと、久しぶりに兄王に会える嬉しさで、アイシャは頬を綻ばした。

ライサはアイシャの両方の横の髪を結うと、そこを白い咲きかけの薔薇と白い小花で飾る。

そうすると、アイシャの可憐さがより引き立ち、まるで妖精のように見えた。

「さあ、出来ましたわ。それでは陛下の元へご案内します」

「ええ」

大きな姿見で自分の姿を確認していたアイシャがそれに微笑んで答えた。

——これなら、きっとあの方もみすばらしいとはおっしゃらないわ。

ルドガーにいつも厳しい言葉ばかりかけられているアイシャもこの支度の出来映えに満足して、ライサの先導でルドガーが待つ謁見の間へ向かった。

その謁見の間の玉座には、ルドガーが肘をついてなにかを考え込むようにして座っていた。

「お呼びでございますか、陛下」

アイシヤは兄王の前で姫君らしく正式な礼をする。

可憐なその様子をつまらなそうに見やりながら、ルドガーは早々に話を切りだした。

「……この度、おまえの婚礼の話がまとまった」

控えめにたたずんでいたアイシヤはその言葉に衝撃を受けたようにルドガーの顔を見返した。

「わ、わたくしの婚礼でございますか……？」

王妹たるもの、いつかは来る話だとアイシヤも思っていた。

ただ、それがこんな急に訪れるものだとは思ってもいなかった。

「おまえの嫁ぎ先はハーメイだ。下賤の出のおまえが小国とはいえ、国王の正妃となれるのだ。ありがたく思うのだな、アイシヤ」

ルドガーがアイシヤを下賤の出と言ったのには訳があった。

彼女は先王の第二王妃の娘だが、先王とは血の繋がりのない姫だったのだ。

つまり、ルドガーとアイシヤは兄と妹という関係ではあるが、まったくの赤の他人だった。

そして、彼とアイシヤが折り合いが悪いのもこれに起因していた。

「……ハーメイ……」

——わたしがハーメイの王妃に。

確かにわたしの出自から考えたら、これほどの良い話はないのか

もしれないわ。

それでも突然訪れた自分の婚姻話に、アイシャはうろたえてしま
う。

下賤の者と蔑まれても、まだアイシャはこのトウルティエール王
宮に身を置いていたかったのだ。

「これで賤しいおまえと縁が切れると思うと清々するな。……ただ、
おまえはこの大国トウルティエールの王妹として嫁ぐのだ。このわ
たしに恥をかかせる真似だけはするな」

「は、はい」

ルドガーの辛辣な言葉にアイシャの身が震える。

アイシャは泣くまいと思ったが、その瞳には既に涙が浮かんでい
た。

優しい言葉など望めるはずもなかった。

しかし、アイシャはどうしても彼にそれを期待してしまうのをや
められなかった。

……だが、空しいその時はもう終わりを告げるのだ。

自分がこの王宮から出てしまえば、彼とはもう二度と会うことは
ないのだから。

「……泣いて同情を誘うつもりか。おまえは本当に浅ましい女だな」
ルドガーが心底嫌そうに言う。

すると、アイシャの頬を涙が伝っていった。

陛下は本当に優しくないとアイシャは思う。

けれど、それは仕方のないことなのだ。

わたし達が彼から奪ってしまったものはとても大きく。

「わたしの前で泣くな。鬱陶しい」

「は……い、申し訳、ございませ……」

ルドガーの叱責に涙を止められなくなったアイシャをかばうようにしてライサがその前に立った。

「御前失礼いたします。陛下、アイシャ様はもう下がられてよろしいでしょうか？ 姫様はお話ができる状態ではございませんし」

「ラ、イサ……」

アイシャがただ一人信頼のおける侍女の名前を呼ぶと、ルドガーは忌々しそうに顔をしかめた。

「いや、いい。もう話は済んだ。わたしがここを出ていく。ライサ、その鬱陶しい女をどうにかしろ」

「……かしこまりました」

ライサが頭を下げると、ルドガーは玉座から立ち上がりその場を去った。

ライサから手巾ハンカチを渡され、アイシャは涙を拭くと大きく息をついた。

「……ライサ、ごめんなさい。こんなふうに取り乱してしまって」

「アイシャ様は気になさらなくてよろしいですよ。……それにしても、急なお話でしたわね」

「ええ……」

安心させるかのように優しく語りかけるライサに幾分落ち着いたアイシャは頷いた。

確かに急な話だった。

王族と名乗ることすらおがましいと自分でも思っていたアイシャは、いずれはこの国の貴族にでも降嫁することになると思っていた。しかし、それがまさか隣国の王の花嫁とは。

「でも、これもよい機会かもしれませんわ。アイシャ様はこれまでのことはお忘れになって、ハーメイの国王様とお幸せになられるとよろしいのです」

「……ええ」

ライサの慰める言葉に、しかしアイシャはどこか哀しそうに頷いた。

——多分あの方と会うのはこれが最後だろう。

……結局、この想いは告げることすら出来なかった。

「アイシャ様……」

ライサが衣装の胸元を掴みながら俯いたアイシャを気遣わしげにのぞき込む。

アイシャはついぞ叶うことのなかった恋の痛みに、いつの間にか涙を流していた。

02 昔語り(1)

「……アイシャはどうしている」

再びライサだけを今度は執務室に呼び出したルドガーは、気がかりそうに眉を寄せて尋ねた。

先程アイシャが自分のきつい言葉で涙を流していたことをルドガーは内心では気に病んでいた。

「今は落ち着いておられます。……後でご心配なさるくらいなら、最初からあのようなことをアイシャ様に申し上げなければいいのですわ。……アイシャ様には突然他国へ嫁ぐ戸惑いもあるでしょうに、その上であのおっしゃりようはあまりにもお可哀想です」

「う……む」

ライサの小言にますますルドガーの秀麗な顔が歪む。

出来れば、こんな時ぐらいは優しい言葉をかけてやるべきだったかもしれない。

しかし、長年の習性というのは簡単には抜けないものだ。

それに、今回仕方なくアイシャを他の男に渡すことに決めたのもそれに拍車をかけていた。

ルドガーは本当はアイシャのことを愛していた。——それもかなりの長い間。

出来ることならば、アイシャを誰にも渡さずに自分のものにしてしまいたかった。

だがそれは、アイシャ母娘がこの城に現れた時点で、許されないことだと運命づけられていたのだ。

——ルドガーは思い返す。

忘れようにも忘れられない、その日のことを。

事の始まりは先王ディラックが城に招いた美貌の踊り子クリステイナに恋をしたことによる。

その当時、ルドガーは十歳だった。

ディラックがクリステイナを第二王妃に据えることに決めると、当然正妃を含む周囲は反対した。

おまけにクリステイナには死別した夫との間に娘がいたのだ。それがアイシャだった。

「卑しい踊り子などを妃に据えるなど、聞いたこともございません！　どうか、陛下お考え直してくださいませ。聞けばあの女には連れ子までいるというではありませんか。陛下は、トゥルティエル王家に卑しい血を混ぜるおつもりなのですか！？」

今までディラックは一夫多妻制にも関わらず、今まで他に妃を娶らずにいた。それは確かに彼がオーレリアを愛しているという証でもあった。

そしてその寵愛を一身に受けていたはずの正妃オーレリアは国王ディラックに必死に訴えた。

「……黙りなさい。そなたのそんな言葉は聞きたくない。それに、もうこれは決定したことです」

静かに言うディラックに、オーレリアは愕然とその場に立ち尽くす。

「……第一王妃を部屋に連れて行きなさい。なるべく気を高ぶらせないように」

正妃ではなく、わざとかのような第一王妃という言葉はオーレリアの逆鱗に触れた。

「すべて陛下のせいではありませんか！　わたくしは認めません！　絶対に許しませんわ！」

近衛や侍女に無理引きずられるように連れられながら、オーレリアは絶叫する。

その様子を苦々しい様子で、見つめていたディラックは侍女長に

命じた。

「王と妃の間の扉を全て施錠するように」

それを聞いた者達は思わず息を飲んだ。

それはすなわち、王が正妃を拒絶したも同然ということだ。

「陛下……、それはあまりにもオーレリア様がお気の毒ですわ」

今まで共に国のために尽くしてきたというのに国王のこの仕打ちはあまりに冷酷すぎる。

「オーレリアには正妃という身分がある。それだけで充分でしょう。……それよりも正妃がクリスティナ達に手を出さぬようによく見張っておくように。あの様子ではかなり不安だ」

「――父王っ、母上に対してその仕打ちはあまりにも酷すぎます」
それまで黙って事態を見守っていたルドガーが苦言を呈した。

しかし、それを国王は鼻で笑った。

「まだ成人になるのに年数があるそなたがなにを生意気なことを言いますか。そんなことは政務のことを少しは理解できるようになっ
てから言いなさい」

「……正妃を疎かにして、どこの馬の骨ともしれない女性を寵愛することが政務ですか」

十歳の子供とも思えない大人びた口調でルドガーが正論を言う。
一瞬ディラックは絶句すると、ややして気を取り直したようにルドガーに命令した。

「黙りなさい。いずれおまえに約束された王太子の身分を破棄してもいいのだぞ。……そうすれば、おまえの母は正妃である必要もなくなる」

国王ディラックは、穏やかな口調に隠した牙を血を分けたはずの息子に剥く。

「……あなたは！」

拳を握って王に飛びかかろうとするルドガーを近衛兵達が必死に止めた。

ここでルドガーが王に危害を加えては、この国は本当に後継者がいなくなってしまう。

ディラックは羽交い締めにされるルドガーを冷たく一瞥すると、クリスティナ母娘に用意された部屋へと足を向けた。

それをただ見ているしかできない己の無力さに憤りながら、ルドガーは涙を堪えていた。

「あつ、おうさま!」

「アイシャ」

アイシャがディラックの姿を認めると美しい灰桜色の髪をなびかせて駆け寄っていった。

「そういえば、アイシャ。歳はいくつになりますか」

「七歳です」

ディラックに抱き上げられながら、幼いアイシャは愛らしく答える。

その様子にディラックは相好を崩した。

「そうですか」

成さぬ娘ではあるが、アイシャはとても可愛らしく、いつまでも愛でたくなる。

クリスティナとはあまり似てはいないが、それでも成長すればさぞ美しい姫になることだろう。

「そなたにはいつか、似合いの相手を用意しましょう。……そして、素晴らしい地位も」

その言葉が理解できないアイシャはきょとんとしてディラックを見ている。

「……陛下。わたし達はここには留まらない方が良いのでは。第二王妃の地位など、わたしには過ぎますわ」

楽団の仲間と引き離され、無理矢理に王宮に押し込まれたクリス

ティナがあまりの大事に顔色をなくしている。

ディラックはアイシャを床におろすと、不安げなクリスティナを抱き寄せた。

「わたしはそなたを離しませんよ、クリスティナ。正妃が既にいなければそなたをその座に据えたいところです。いえ、第一王妃をどうにかすればあなたが正妃に出来ますね」

それは正妃をいつ排除しても構わないのだという非情な言葉だった。

「！ そんな、それでは正妃様がお気の毒すぎますわ。お願いですから、二度とそんなことはおっしゃらないでくださいませ」

クリスティナが首を横に振ってディラックに懇願する。

「……あなたがわたしを愛すると誓うのならば、二度と口にはしませんよ、クリスティナ。愛しい人」

二人のただならぬ様子を幼いアイシャが目にして固まっている。

その体をアイシャの侍女のライサが慌てて抱き上げて、別室に連れていった。

「……誓います。ですから、かつての仲間にも、正妃様にも酷いことはなさらないでください」

「分かってくださればよいのです。クリスティナ、愛しています」

これ以上ない程の優しい笑みを浮かべながら、ディラックがクリスティナに口づける。

いわば、クリスティナは仲間達の命と引き替えに無理矢理その地位に就かされた囚われの王妃だった。

そしてクリスティナは己の運命を恨みながら、この王が誓いを守ってくれるのを祈ることしかできなかった。

03 昔語り(2)

それから国王に冷遇された正妃によるクリスティナへの嫌がらせが始まった。

「まあ、酷いですわ!」

クリスティナの衣装部屋のドレスが全て泥で汚されているのを発見して、侍女達が眉を顰めた。

名こそ出さないが、侍女達は正妃のことを口々に非難している。

「他の部屋に衣装があつたでしょう。そこから出てきてちょうだい。……このことは、陛下にはくれぐれも内密にね」

「は、はい……」

クリスティナが侍女に念を押したが、その者以外も納得できないような顔をしていた。

今や誰の目にも王の寵愛は第二王妃であるクリスティナにあるのだ。

それ故に、黙って正妃の横暴を許すのはクリスティナに心酔しつつある侍女達には看過できなかったのである。

「クリスティナがオーレリアの手の者に衣装を汚されたと?」

ディラックは執務の手を止めて、その侍女から報告を受けていた。彼はそれを聞きながら嫌悪をあらさまに顔に出していた。

「はい、十中八九間違いないと思われます。正妃様付きの使用人が出入りするのを目撃した者もおります」

「……そうですか。では、正妃の衣装を全てズタズタに引き裂くように」

それを聞いた侍女は息をのんで、さすがにためらう様子を見せた。

「で、ですが……」

「王であるわたしが許可します。必ず実行に移すように」

命令を受けた侍女は顔を青くしながら頷くしかなかった。これを拒否した場合、王からどんな処罰が待っているか分からない。

報告に来た侍女が退室すると、ディラックは手元の真新しい紙をぐしゃりと片手で握り潰した。

「……オーレリア、クリスティナに手を出すとは小賢しい」

だが、このことで少しあの妃もおとなしくなるだろうとディラックは事態をまだ軽く見ていた。

翌日、国王の命を受けた侍女の手の者によって、それは実行された。

「正妃様、大変ですわ！ お衣装が全てズタズタにされております」

「なんですって！ ……あの女、己の血の卑しさも顧みもせずになんと恐ろしい真似を」

見るも無惨な姿になった衣装にオーレリアは顔色を無くしながらもここにはいない憎い恋敵に悪態をつく。

それまで卑しいクリスティナにしてやったりと嘲笑していた正妃オーレリア側にとって、その反撃は激しい衝撃だった。

まさか、クリスティナ側が仕返しをしてくとは思っていなかったのである。

……実際は、クリスティナは関わっておらず、王命によるものであったが、まだ彼女達はそこまで把握してはいなかった。

衝撃からどうにか立ち直ったオーレリア付きの侍女達は、賓客用

の衣装部屋から正妃の衣装を調達して彼女に着付ける。

そして急遽衣装屋を呼びつけて、ドレスを何十着と新調させたのである。

それを聞きつけたディラックは正妃の浪費に思わず顔をしかめた。衣装ならば、要人用の予備の部屋にいくらでも準備してあるのだ。今回オーレリアがドレスを大量に新調し、それに合わせた飾りなども作つたため、国の財政圧迫までとはいかないが、妃にかかる費用の上限を明らかに超えてしまったのである。

「オーレリアに無駄な出費を控えるようにと伝えなさい」

……もつとも、この件についてはディラックの自業自得とも言えた。

クリステイナと同じように衣装を汚すだけにとどめたならば、今回の正妃の浪費には繋がらなかったかもしれないのだ。

そして、宰相を通して、オーレリアに伝えられた言葉に対しての彼女の返答はこうだった。

「卑しい女に衣装をズタズタにされたのです。それに、正妃の衣装がみすばらしいのはいけませんわ。ですから衣装を新調するのは当然のことです。ご不満があるのでしたら、あの女におっしゃってくださいませ」

正妃に衣装を汚されたクリステイナは、その洗濯が終わるまで予備のドレスで過ごしているというのに、それを思うとディラックは余計にオーレリアのことを厭わしく感じられた。

そして、正妃の嫌がらせはクリステイナにとどまらず、その娘のアイシャにも向けられた。

「きゃああ」

アイシャは鏡台の上に芋虫の死骸を見つけて思わず叫びをあげた。芋虫はバラバラにされて、ところどころ潰れて鏡台の上に汚らしく張り付いている。

「誰かに片づけさせますわ」

アイシャ付きの侍女のライサが言うが、若い侍女達は気持ち悪がつて傍にすら近寄らない。

ライサは男性の使用人を呼び出すと、鏡台の上を片づけさせた。悪趣味なことに、道具のあちこちに芋虫の死骸を擦りつけたらしい。肉片がブラシや道具類にこびりついている。

仕方なく、その道具類は処分することにライサは決めた。

それから、ライサはクリスティナとディラックに事の次第を伝えた。

「わたしだけならともかく、アイシャにまで……酷い」

正妃から王の寵愛を奪った形のクリスティナは自分が嫌がらせを受ける分には仕方ないと諦めていたが、それがアイシャにまで及んだことを知り、憤った。

「……とにかく、アイシャの道具を駄目にした者は探し出して、処罰しておきます。クリスティナ、それで許してください」

「え、ええ。なにとぞ、その者にはあまり酷い罰を与えないでくださいませ。おそらく、逆らうことの出来ない立場の者でしょうから」
確かに実行したのはオーレリアの使用人だろうが、身分の低い彼らには正妃の命令に抗うことなど実質不可能だ。

「……分かりました。心に留めておきます」

出来ることなら拷問にでもかけたいところだが、クリスティナのたっての願いだ。

仕方なくディラックはその懇願を聞くことにした。

それにそのような末端のものを処罰したところで、オーレリアに

は痛くも痒くもないだろう。

そして、同じようにオーレリアの道具類を駄目にしても、衣装の時と同じように確実に高価な物へ新調されるだろう。

そこにも正妃オーレリアの計算を感じて、ディラックは齒噛みし、彼女への憎しみを募らせた。

そしてクリスティナに聞こえないように呟く。

「オーレリア、このままで済ますとは思わないことだ」

——しかし、ディラックのその言葉とは裏腹に、正妃オーレリアのクリスティナ母娘への仕打ちは次第に酷いものへと加速していったのである。

04 昔語り(3)

それが起こったのはアイシャが八歳の時だった。

ふといたずら心を起こして、アイシャは侍女の目を盗んで庭園に一人でいた。

子供らしい行動ではあるが、微妙な立場にあるアイシャには非常に不用心な行動であった。

そのアイシャが庭園の池に手を浸しているのをたまたま正妃オーレリアが見つけたのが彼女の不運だったろう。

近くに人の気配はない。王の寵愛を一身に受けているクリスティナの子を害するには絶好の機会といえた。

しかも、成さぬ子のはずなのに、この少女をディラックは目に入れても痛くないほどに可愛がっているのだ。

王太子になる予定のルドガーでさえ、帝王学を学ばせること以外はろくに構いもしないというのに、この差はなんなのだ。

クリスティナも憎いが、全く王家の血を受けていないのに、ディラックに愛されるアイシャも憎らしい。

「あの卑しい子供を池に突き落としておしまいなさい」

傍にいた侍女にオーレリアは命ずる。

「しかし、それではあの娘の命に関わってしまうのではないでしようか？ それは、さすがに陛下がお怒りになるのでは？」

まだ年若い侍女は、正妃の容赦ない命令に戸惑ったように彼女を諫めた。

しかし、それは逆にオーレリアの怒りを買ってしまった。

「一介の侍女の分際で正妃のわたくしの命に逆らうのですか？ なんならおまえの実家になんらかの処分を与えてもよいのですよ」

「そ、それだけはお勘弁ください。……かしこまりました。正妃様のご命令に従います」

この侍女の出身の男爵家はそれだけでなく、資金繰りが厳しい。

侍女は仕方なくオーレリアの命に従うしかなかった。

アイシャは池に泳いでいる魚に目を奪われている様子で、熱心に池の中を見ていた。

オーレリア付きの侍女は、アイシャに気づかれないようにそろそろと近づくと、その背を思い切り突き飛ばした。

「きゃああ!？」

いきなりのことにアイシャが悲鳴を上げて池に落ちた。

運動神経は良いアイシャだが、ドレスが水を吸って上手く泳げない。

「ふふふっ、よくやったわ! おまえには特別になにか報奨をあげましょう」

オーレリアに上機嫌に言われても、アイシャを突き飛ばした侍女は己の罪深さにその場でがくがくと震えるだけだった。

——その時だった。

「なにをやっているのですか、母上! いくらなんでもこれはやりすぎです!」

その場にルドガーが現れ、池の中に自ら入って、溺れているアイシャを助け出した。

そして、アイシャの背をさすって水を吐き出させる。

「……大丈夫か?」

「あ……、大丈夫です」

てっきり敵対していると思っていたルドガーに助けられて、アイシャは内心驚いていた。

てっきりこのまま自分は死んでしまうと思っていたのに。

この方はわたしの命の恩人だ。

その時から、アイシャはルドガーに対する見方が変わった。

そして、彼に対して好意を持ち始めた。これがアイシャの初恋の

始まりだった。

対するルドガーは、アイシャの肌に張り付いたドレス姿に内心動揺していた。

アイシャはまだ八歳なので娘らしいふくよかさはまだない。

だが、透けて見える肌に妙な艶めかしさを感じてアイシャから目を離せなかった。

……たぶんこの娘は、数年後にはとても美しくなるだろう。

そんな予感を感じて、ルドガーは今まで関心のなかったアイシャのことが急に気になり始めてきた。

「ルドガー、なにを余計なことをしているのです。せっかく卑しい娘を葬り去る良い機会でしたのに」

かなり憤慨した様子でオーレリアが息子に抗議する。

「ですから、やりすぎだと言うのです。この母娘が憎いのは分かりますが、このことが父王に知られたらきつと激怒されますよ」

「陛下に知らなければよいのです。そうすれば、ただの事故として処理されるでしょう」

甘い考えのオーレリアにルドガーは頭を抱え込みたい気分になった。

「それは無理ですよ。この母娘にはそれなりの護衛が付いています。それもかなりの力を持つ魔術師が。このことが父王に知られるのも時間の問題ですよ」

ルドガーのその言葉に、自分のしでかしたことの重大さを思い知って、オーレリアは青ざめた。

……だが、命じたのは自分だが、実際に娘を池に突き落としたのは侍女だ。自分ではない。

オーレリアはそう思い直すと、自分の息子に告げた。

「それがどうしました。卑しい娘を池に突き落としたのはこの侍女です。わたくしに非はありませんわ」

「そんな、正妃様！」

オーレリアの命令を仕方なくきいた侍女が悲鳴のような声を上げる。

ルドガーはオーレリアのその返答を聞いて、これ以上母になにか言うのは無駄だと思い、池の傍に座り込んでいたアイシャの腕を取り立ち上がらせた。

「早く着替えろ。そのままでは風邪をひく」

「はい。ありがとうございます。ルドガー様」

ルドガーの優しい言葉にアイシャは再び驚きながらも、にっこりと笑った。

ルドガーはアイシャのその愛らしい笑みにどきりとする。

……どうしたというんだ、わたしは。こんな子供に気を取られるなどおかしいではないか。

ルドガーが内心動揺している内に、アイシャ付きの侍女のライサが慌てた様子で現れた。

「まあ、アイシャ様、そのお姿はどうなさったのですか!？」

全身ずぶぬれのアイシャを見て、ライサが驚いた声を上げる。

「お魚を見ていたら池に落ちちゃったの。ライサ、ごめんなさい」

そこでライサはオーレリアの存在を認め、アイシャの言ったことが嘘だと言うことに気づいた。

おそらく、オーレリアがアイシャになにかしたに違いないと、見る見るライサの顔が厳しくなっていく。

「なんですか。この卑しい娘の侍女は正妃に対する礼もなっていないのですか。その無礼な表情はなんです」

「失礼いたしました、正妃様。以後気をつけます。それでは、御前失礼いたしますわ」

オーレリアの嫌みもそれほど気にした様子もなく、ライサは笑顔で彼女に礼をする。

「さあ、アイシャ様、すぐに湯殿に参られて、着替えましょう。お風邪を召したら大変ですわ」

「ええ、ライサ」

アイシャは頷くと、正妃とルドガーに退出の挨拶をして、遅れてやってきた近衛の者に伴われてその場を去った。

しかしルドガーの中では、先程のアイシャの歳には似合わない艶めかしさや、愛らしい笑顔が幾度も繰り返されていた。

敵対する娘だというのにわたしはどうしたんだ。先程からあの娘のことが気になって仕方がない。

それが恋という感情だということにルドガーが気づくのは、だいぶ経ってからだった。

05 昔語り(4)

——城の堀に両手足の爪の剥がされた侍女の死体が浮かんだ。

それは、アイシヤを池に突き落とした侍女だった。

そのことを居室で知ったオーレリアは、己の侍女のあまりの惨たらしい死に様に青ざめた。

さすがにこれは、クリステイナでは出来ないだろう。

……実行に移せるとすれば、それは国王ディラックでしかありえない。

己の侍女を恐ろしい拷問の末に城の堀に投げ捨てるなど常軌を逸している。

オーレリアはディラックの容赦なさに、しばらくその身を震わせていたが、やがてなにかを決意したように顔を上げた。

「陛下の元へ参ります」

そしてオーレリアは侍女数名を引き連れ、ディラックの執務室へと押しかけたのである。

しかし、実際に入室が許されたのはオーレリア一人だけだった。

オーレリアは侍女も付けられずかなり不満だったが、執務室にはディラックのみであったので、おそらく人払いをしたのだろうと納得した。

——オーレリア付きの侍女を拷問の末に堀に捨てるなどという、残虐極まりないことをしたのだ。もし、人に聞かれたら温厚で通っているディラックの城での評判にも関わる。

皮肉なことに彼の愛しい妃であるクリステイナにも恐れられる可能性はあるのだ。

しかし、ディラックは余裕さえ感じさせる笑顔でぬけぬけと言った。

「オーレリア、わたしに何用でしょうか？」

その姿にオーレリアは怒りを抑えきることが出来なかった。

「……っ！ わたくしの侍女を恐ろしい方法で殺害されたのは陛下でございましょう！？」

それに対してディラックはなんでもなしのようにオーレリアを嘲笑った。

「それがなんだというのです」

「な……っ」

てっきり否定の言葉が来るかと予想していたオーレリアはディラックの開き直りとも言える態度に絶句した。

「あの侍女はあなたの命令とはいえ、アイシャを殺害しようとした。あれは妥当な罰です」

「陛下は成さぬあの娘がそこまで大事だというのですか！」

卑しい血の娘のために、仮にも貴族の血を引く侍女が殺されたのだ。

オーレリアは血走った瞳を見開いて、ディラックを見つめた。

「アイシャはとても可愛い姫ですよ。あの色合いも珍しいものですし、将来はさぞ美しくなることでしょう。……ただ、我が血を受けていないために彼女の地盤は酷く弱い。それには確固とした王族との婚礼が必要でしょう」

それは、数年後に王太子となるルドガーとの婚姻を暗に示していた。

しかし、そんなことをオーレリアが許すはずなどない。

「まさかルドガーにあの卑しい娘を娶らせるおつもりですか！？」

わたくしはそんなことは許しません！ 絶対になにがあろうと許しませんわ！」

喉も裂けよとばかりに叫んだオーレリアに、ディラックが煩そうに耳を覆う。

「あなたがいくら反対しても、もう決めたことです。あなたにはもうそんな権力はないのですから」

それは、正妃であるオーレリアの政治的基盤の弱体化を示唆していた。

王に煩わしいと思われているオーレリア、それに対して寵愛を一身に集めているクリスティナ母娘。

果たしてどちらが優勢かは、頭に血の上ったオーレリアにも理解できた。

——しかし。

理性では理解できても感情は別物である。

かの母娘が現れてからというものの、苦いものを嚙む思いでいたオーレリアは再び叫んだ。

「それだけは、許しません。わたくしの目の黒いうちは絶対に許しませんわ！」

「……オーレリア、せっかく正妃という立場に据え置いているというのに、それにふさわしい態度もとれないのですか？　なんなら、その地位から引きずり降ろしてもいいのですよ」

どこまでも非情に言うディラックに、オーレリアの感情がまた爆発した。

「いったい、どなたのせいののですか！　とにかく、わたしはあの卑しき者達を許しません！　これ以上はお話しても無駄でしょうから、わたくしはこれで失礼させていただきますわ！」

オーレリアは踵を返すと、足音も荒く王の執務室から退出していった。

ルドガーとあの卑しい娘を娶せるなんてとんでもない。

そんな恐ろしいことになる前にあの母娘には消えてもらわねば。

今までは我慢していたが、確実にあの二人をしとめなければならぬ。どこかで腕のいい暗殺者でも雇わなければ。

そんなオーレリアの感情を知るかのように、ディラックは溜息を付いた。

これは早々にオーレリアの反撃が始まるだろう。

その前にその芽を摘まなければならない。

「アルディアス」

ディラックは今まで姿を消させて待機させていた魔術師の名を呼んだ。

すると、すぐにまだ幼さの残る魔術師が姿を現した。

この魔術師はまだ若いが、トウルティエール王宮では実力で勝てる者はいない。

「――正妃を消せ」

あまりといえばあまりの言葉に、アルディアスと呼ばれた魔術師は絶句した。

「しかし、それではあまりにも正妃様がお可哀想では――」

正妃への王の仕打ちを知っている魔術師は言葉を濁す。

「これは王命です。このままではオーレリアはクリスティナ達に取り返しの付かないような危害を与えるかも知れません。その前に正妃を消すのです」

そこで、ディラックは一端言葉を切ると、顎に手を当てて考えるようにして言った。

「……そうですね。死因は、王に顧みられなくなった正妃の傷心のあまりの投身自殺というのが一番良さそうですね。アルディアス、首尾良く頼みますよ」

「……かしこまりました」

これ以上、恋に狂ったこの国王に進言しても無駄だと悟った魔術師は、かなり気が進まなかったが王命は王命だ。その罪深さを知りながら、アルディアスは仕方なく了承した。

激昂して王妃の間へ戻る途中のオーレリアは、どの経由でクリスティナ母娘を殺害するか考えていた。

さしあたって、この現状を実家である侯爵家に伝え、協力してもらうのが一番良いような気がした。

ただ、興奮していたオーレリアには、それが露見した時に、実家に多大な迷惑がかかるということは頭になかった。

しかし、クリステイナが現れたことで、王は夜にオーレリアを訪れることはしなくなった。

いくら王太子候補の王子を産んでいるとはいえ、まだ女盛りのオーレリアへの王の処遇を彼女の実家の侯爵家も不満を持っている。

そこへ、どこの馬の骨ともしれない娘を正当な血を引く王太子候補のルドガーが娶せられるのを侯爵家が黙っている訳がなかった。

そこまで考えを巡らせてオーレリアは力を得ると、くすくすと笑いを漏らす。

——そんな婚姻は絶対に認めない。あの二人には陛下がわたくしの侍女にしたように陰惨な最期を迎えてもらいましょう。

クリステイナ母娘の惨たらしい最期を想像して溜飲を下げたオーレリアは陰湿な笑みを浮かべた。

すると、そこへ年若い宮廷魔術師がいつの間にか姿を現していた。どうやら、移動魔法でオーレリアの傍に来たらしいが、断りもないそれは、あまりにも不作法と言えた。

「なんです、そなたは。無礼な」

オーレリアは声を荒らげるが、対する魔術師は怒りを露わにする彼女を冷ややかに見ているだけだ。

「誰か……っ」

オーレリアは慌てて周りを見渡すが、傍にいたはずの侍女達がいっつの間にか消えている。

「申し訳ございません。これは王命ですので、あなた様には儚くなつていただきます」

その魔術師の言葉にオーレリアは愕然とする。夫であるはずのデイラックが自分を消そうとしているのか。

確かに、アイシャを殺せとは命じた。

その代償は実行に移した侍女に被せたはずだ。

第一、あの卑しい子供はまだ生きているではないか。

しかも、自分の王子と娶せようとまでされている。

それで、なぜ自分が死なねばならぬのか。

「そんなことは許しません！ あの下賤な母娘も陛下も。正妃をこんな目に遭わせるトゥルティエールなど呪われるがいい！」

その言葉を最期に、オーレリアの体は城の露台バルコニーの近くの空間に放り出された。

その後は加速しながら墜ちていくだけ。

オーレリアは恐怖のあまり絶叫した。

正妃が露台から身を投げたことで、城内は騒然となった。

王宮では、クリスティナに王の寵愛を奪われたのを苦にしての自殺、との見方が大勢を占めた。

美しかった姿は見る影もなく、手足はあり得ない方向に折れ曲がり、脳髓が辺りに飛び散っていた。

その体は舗装された地面に張り付いていて、使用人達が苦勞して引き剥がしてみれば、美貌は惨たらしく潰れていた。

「黙っていれば美しかったものを。こうなっては台無しですね、オーレリア」

そう言って楽しそうに笑うディラックに、王命を受けて仕方なく実行した魔術師のアルディアスはうすら寒いものを感じて禁じ得なかった。

「……正妃様は最期にこの国を呪う言葉をおっしゃっておいしかったです。それでもディラックは顔色も変えない。更に楽しそうに笑うだけだ。」

「そうですか。ですが、死人にはなにも出来すまい。……これで、クリスティナ達に憂いはなくなりました。邪魔者もいなくなっただけですし、これで晴れて彼女を正妃に出来ます」

しかし、第二王妃のクリスティナはそれを堅く辞退した。

真実は知らなかったが、彼女はオーレリアの身投げに心を痛めていた。

それ程までに正妃を追いつめた自分がその後釜として、簡単にその座に付いたのではオーレリアが余りにも浮かばれないと考えただ。

『許しません。あの下賤な母娘も陛下も。正妃をこんな目に遭わせるトウルティエールなど呪われるがいい』

——その死の間際に呟かれたオーレリアの呪いの言葉。

それを正妃の苦し紛れの言葉と軽く受け取っていたディラックだったが、その内に生死をさまよう病に冒されてしまった。

周囲の者の手厚い看護もあって、どうにか数日で寝台に起きあがれるようになったディラックは、その時になって初めてオーレリアの恨みの深さを思い知った。

そして、彼女が身を投げたとされる露台を中心に、城のあちこちに呪い除けを施したのである。

06 昔語り(5)

しばらくの後、正妃オーレリアの葬儀がしめやかに執り行われた。オーレリアの子であるルドガーを始め、大半の者は彼女の死因を投身自殺と思いこんでいたが、対外的には病死とされた。

大国の正妃が自殺では、外聞が悪すぎるからだ。

葬儀の後、クリスティナはアイシャを伴ってルドガーの元を訪れた。

「この度の正妃様のご不幸はすべてわたし達のせいですわ。誠に申し訳ございません、ルドガー様」

ルドガーに頭を下げるクリスティナ母娘をルドガーは冷めた目で見ていた。

「……まだわたしは王太子ではありません。父王の寵愛を受けているあなたが一介の王子に頭を下げられても困ります」

ルドガーにしてみれば、クリスティナの行動は、彼に謝罪することで己の罪深さから逃げるための自己満足としか受け取れない。

クリスティナ母娘もオーレリアから随分と嫌がらせを受けたのかも知れないが、それでも母は元々は優しい女性だったのだ。

それが、それまで尽くしていた父王にさんざん邪険に扱われれば、徐々に性格が歪んでいても仕方なからう。

——そして、今回の悲劇だ。

大国の正妃としては、寂しすぎる死であった。

彼女の息子として、その寂しさを知ることもありせず、アイシヤを亡き者にしようとした時は叱責までしてしまったことが気に病まれる。

……いや、あの時は彼女のためにも良かれと思って言ったのだ。それが、母に伝わらなかったことがルドガーには哀しかった。

「ルドガー様……」

アイシャが胡桃色の瞳で哀しそうに見てくる。

この姫は自分を心配してくれているのだろうか。

そう思うと、ルドガーは少し心が温かくなる気がした。

しかし、そう感ずること自体が母を裏切っているような気になり、ルドガーは後ろめたかった。

今回オーレリアが非業の死を遂げたのも、アイシャを亡き者にしようとしていたのがきつと関連しているのだろうか。

「話が済んだのなら、お帰りください。なんと言ってもわたしは母を亡くしたばかりなのですから」

ルドガーははっきりとした拒絶をクリステイナ母娘に示すと、近衛に言って彼女達に早々に帰ってもらうことにした。

「クリステイナ様、アイシャ様、お部屋までお送りします」

「はい」

ルドガーの心を慰めるどころか、多感な時期にある彼を逆に不快にさせてしまったと知って、クリステイナの美しい顔が歪む。

「アイシャ様！」

しかし、近衛の者の手をかいくぐってアイシャがルドガーの傍へ駆けていった。

その大きな瞳には涙が溜まっていて、ルドガーは動揺してしまう。

……だから、こんな子供になんだ。これではまるで――。

「ルドガー様、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……」

アイシャは呆然とするルドガーの前でぽろぽろと涙をこぼす。

「アイシャ」

クリステイナがアイシャの体を抱きしめ、ルドガーの視線から隠した。

アイシャのしたことが、王子の気に障るのではと判断したからだ。「それでは、失礼いたしますわ。お騒がせしまして本当に申し訳ありませんでした」

クリステイナ母娘はルドガーに淑女の礼をすると、今度こそ近衛

に連れられて退室して行こうとした。

けれど、アイシャがその一瞬に彼を切なげに見つめてきて、ルドガーはどきりとする。

母を亡くしたばかりで、その要因であろう少女に気持ち揺らぐのが少しばかり悔しく、ルドガーはアイシャを睨みつける。

すると、愛らしい姫はびくりと体を震わせて、瞳に涙をたたえながら彼から目を逸らした。

そして、誰もいなくなった室内で、ルドガーは泣きたいような叫びたいような狂おしい気分になった。

——母上が亡くなったのは、あの娘のせいだ。だから、わたしはあの娘を憎もう。それが、わたしが唯一出来る母上への弔いだ。

ルドガーはアイシャに対する淡い感情を憎しみにすり替えて、目の前の哀しみから目を逸らした。

それでも、先程のアイシャの愛らしい泣き顔が脳裏から離れない。

「わたしは、憎む——あの姫を」

そうだ、憎んでしまえばこんなおかしいな感情を忘れられる。

……そうやって、無理矢理ルドガーはアイシャに憎しみを感じるように自分にし向けた。

そして、その日を境にルドガーはアイシャに冷淡な態度を取るようになった。

それからしばらくは、ルドガーはアイシャに出会うことはなかった。

彼女に会えないのを少し寂しく思う自分が煩わしく、そしてそんな感情に駆り立てるアイシャが憎らしく、ルドガーは唇を噛んだ。

こんなことでは本当に気が滅入ってしまうと思い、ルドガーは庭園に散策に出かけることにした。

「ルドガー様、おはようございます」

同じように侍女のライサに伴われて庭園を散策に来ていたアイシヤがルドガーに出会ってきらきらとした瞳で挨拶をしてくる。

それを眩しく感じつつも、ルドガーはアイシヤから視線を逸らす。「……あまり気楽に話しかけないでほしい。おまえはわたしの母の仇なのだから」

ルドガーのその言葉に、アイシヤは雷に打たれたかのようにその場に立ちすくんだ。

その瞳にみるみる大粒の涙が浮かぶのを見て、ルドガーは後悔しつつも慌ててその場を立ち去った。

母の仇として、憎もうとしても憎みきれない。

あの愛らしい姿がいけないのだと、ルドガーは齒噛みする。

これで、アイシヤがもう少し普通の容姿なら自分はこんなことで取り乱すこともなかったものを。

ルドガーはそんな己の考えを振り払うように首を横に振ると、国王の執務室に向かった。

父王であるディラックは生死をさまよう病を得てから、寝たり起きたりする日々が続いていた。

その代わりに宰相が一時的に政務を執っていたが、それでは体裁が悪い。

それで、王太子となる予定であるルドガーはまだ成人となるには年数があつたが、宰相のディルスの教育の元、徐々に政務を執り始めたのだ。

それから三年後、ルドガーは十四歳になっていた。

いつ王がみまかっても、既に彼はいつでも政務を執れるようになっていた。

しかし、未成年のままでは体裁が悪い。

なんとしてでも、父王には成人までは生きながらえてもらわねばならないとルドガーは思っていた。

既にそこには血の繋がりによる愛情や尊敬はない。

ルドガーの中では母の死によって、ディラックが正妃を不当に扱ったただの愚王としか思えなくなっていた。

「お呼びでございますか、父王」

ルドガーが王の寝室に呼び出されたその傍には心配そうにクリスティナ母娘が付いていた。

——こんな男でも愛してくれている者はいるらしい。

皮肉な笑いがこみ上げてくるのを堪えながらルドガーは思う。

骨と皮だけのようなになった体は、かつてそれなりの体格だったのが嘘のようであった。

「……ルドガー、そなたに頼みたいことがあります。わたしはもう長くはない」

「……」

ルドガーはそんなことはありません、という下手な諫めの言葉は言わなかった。

どう見ても、ディラックが言うように彼が長く生きられるとは思わなかったからだ。

「わたしはそなたが成人したらすぐに譲位するつもりです。ディルスの報告ではそなたはもう充分王として政務をこなせるはずですから」

……そんなことは承知している。

今現在、政務は全部自分を取り仕切っているのだから。

寝台に縛り付けられている死にかけの病人の言葉をルドガーは冷めきった気持ちで聞いていた。

しかし、その後に続いたディラックの言葉にルドガーは驚愕する。「わたしが頼みたいのは、このアイシャのことです。わたしが儂くなったら、血も繋がらないこの姫は苦しい立場に追い込まれるでし

よう」

「――陛下、なにを……」

クリスティナ母娘も、このディラックの思惑を知らされていないか
ったのか驚いた顔をしている。

「そこでアイシヤが、成人した折りにはそなたの正妃として欲しい
のです。……これで、アイシヤの立場は確固としたものになるはず
です」

「わたしがルドガー様の――」

驚愕したルドガーとアイシヤの視線が交わる。

アイシヤはあれからますます美しくなって、幼いながらもクリス
ティナとはまた違った美を醸し出すようになってきていた。

母の仇とは思いつつも、この三年の間にルドガーはアイシヤに
向かう感情が恋だと既に気づいていた。

……ただ、それは禁忌の感情だった。

これは母を死に追いやるきつかけになった娘。

だから、ルドガーにはどうあっても彼女と結ばれる訳にはいかな
かった。

ただ、愛しいと思う感情と憎しみの感情にさいなまれて、まだ幼
い彼女を汚してしまおうかと思う日はあった。

それをどうにかやり過ごしていたところに、このディラックの言
葉だ。

ルドガーは絶句したまま、愛しくも憎いアイシヤの顔を見つめて
いた。

「これは王命です。……ルドガー従いなさい」

病人とはいえ、この時ばかりは王の威厳を露わにして、ディラッ
クはルドガーに命じた。

王命となれば、逆らうことは不可能だ。

「……御意」

「それでは、婚約の誓約書に署名を」

ディラックは近くにいた侍女から書面を受け取ると、ルドガーとアイシャの署名を求めた。

仕方なくルドガーが署名した後、アイシャが震えながら署名する。どうやらアイシャは己に起こっていることによりかなり動揺しているらしい。

それを見守っているクリスティナも震えながら口元を押さええている。

その中でディラックだけが余裕すら感じさせる笑顔を浮かべていた。

「……それでは、この誓約書をディルスに渡しておきます」

「はい。頼みます、ルドガー」

そして、王の間を退室したルドガーはまだ幼いが、才能は王宮随一を誇る魔術師を呼びだした。

「ライノス」

「はい、お呼びでございますか。ルドガー様」

気配を消して先程の一部始終を見ていた魔術師がその姿を現した。

「この誓約書を燃やせ」

それを聞いたライノスは絶句した。

誓約書を燃やすことは、王命である婚約を破棄することを意味する。

「しかし――」

「責はわたしが負う。もう一度命ずる。燃やせ」

「……あなた様のお心のままに」

ルドガーの意志が変わらないと諦めたのか、まだ幼さを残す魔術師は誓約書に炎をつける。

すると、瞬く間に灰も残さずに誓約書は消え去った。

——これで、わたしを縛るものはなくなった。

清々した気分でルドガーは歩き出す。

その後を心配そうな顔つきでライノスが付いてきていたが、ルドガーは気にしなかった。

一年の後、ルドガーは成人するとトウルティエールの国王の座に着いた。

すると、それを待っていたかのようにディラックが亡くなった。そして驚いたことに、それに衝撃を受けたらしいクリスティナがその後を追って服毒死したらしい。

あんなろくでもない男でもそれ程までに愛していたのかと、その報告をルドガーは冷めた気持ちで聞いていた。

ルドガーとアイシャの婚約誓約書は焼いてしまったので、二人の婚約はもちろん無効となっている。

その結果、なんの後ろ盾もないアイシャが残された。

そしてその日から王宮でのアイシャの苦難の日々が始まったのである――。

07 婚礼

「二週間後に婚礼とは随分とトゥルティエールも急いだものだ」

ハーメイ国王カルラートはその端正な顔を皮肉げに歪めると、かの国から届いた書簡を放り投げた。

「……陛下。トゥルティエールからの書簡をそのようにぞんざいに扱ってはなりません」

宰相のオルグレンが諫めるが、当のカルラートは全く気にした様子はない。

「書簡は書簡だ。それ以上でもそれ以下でもない。……中身はともかくとしてな」

ハーメイの国王、カルラートはまだ二十歳と若い王らしく、いらついた様子で淡い金色の前髪をかきあげた。

「トゥルティエール王妹のアイシャ姫は、とても可憐な美しい姫と聞きますぞ。大国の王女が嫁してくるのです。我が国にとっては良縁ではありませんか」

「……表向きはな」

カルラートは執務机で頬杖を付きながら不満そうに言った。

「ただあの上から見た文面はいくら大国とはいっても我慢できません。なにが『大国の王女を嫁にやるのだから感謝しろだ』。その王女とて、正当な王家の血を引いていないではないか」

先代の王が美しい踊り子に恋をして、その連れ子である娘を王女としたのは、諸国にも知れ渡っている。

それを大上段から偉そうにやると言われて、カルラートは大いに反発した。

それにその王女は、一部では国王ルドガーと並ならぬ関係になっているとの下世話な噂まであるのだ。

そんな姫を大上段に構えて、やると言われても嬉しい訳がない。

「陛下がこの婚礼にご不満でも、わたくし共が受け入れない訳には

参りません。なんといっても、この国はトゥルティエールとガルデア両国の温情によって成り立っているのですから。

「……それは分かっている」

ハーメイは大陸一の小国であった。

おまけに大国であるガルデアとトゥルティエールに挟まれているという立地の悪さであった。

もし、どちらか一方の大国がハーメイに攻め込もうとしたら、すぐにでもこの国は滅ぼされるだろう。

そして、ハーメイ自体が歴史的にトゥルティエール領であり、三百五十年前程昔、時の王の温情で自治領であったハーメイが国として建ったのは奇跡と言うしかなかった。

そういう背景があるために、ハーメイは実質トゥルティエールの言いなりに近かった。

だから、気が進まなくてもトゥルティエール王妹のアイシャ姫を娶ることに決めたのだ。

「しかし、二週間となりますと、婚礼の準備が大変ですな。……陛下、アイシャ姫の婚礼衣装はどういたしますか？」

確かに、それは頭の痛い問題だった。

この短い間に、国民や周辺諸国に今回の婚礼の旨を知らせなければならぬ。

「婚礼衣装なら、姫のドレスをすぐに一着送ってもらえ。それに合わせて衣装を作ればいいだろう」

それを聞いた宰相のオルグレンは驚いたように目を見開いた。

「針子をかの国に送らなくてもよろしいのですか？」

「そんな面倒なことをしていたら、衣装が間に合わん。ただ、衣装の見栄えはよくしておけ。それならトゥルティエールも文句は言わないだろう」

それに、国民向けにも金糸や銀糸で飾られた婚礼衣装は喜ばれるだろう。

なんといっても、この国は細かい刺繍細工と金細工とで国の経済

が成り立っていると言っても過言ではないのだから。

しかし、それには職人たちに不眠不休を強いらなければいけないかもしれない。

そう考えると、カルラートはかなり頭が痛かった。

……しかし、やらないわけにはなるまい。

たとえば気に入らなくても、国同士の繋がりによる婚礼なのだから。

「まあ、針子はこちらには来ないの？」

てっきり魔術師を使って針子を送ってくると思っていたアイシャは少し驚いた。

それでは、婚礼衣装の採寸等はどうするのだろう。

「代わりにハーメイからドレスを一着送って欲しいとの連絡がありましたわ」

「まあ、それなら大丈夫そうね」

アイシャは、ハーメイの案に感心して手を叩いた。

「それから、かの国から式の段取りの書面が送られてきています」
ライサに見せて貰った式次第はごく簡単なものだった。

大貴族達の立ち並ぶ中、婚礼契約書に緒瞑して、その後^{バルコニー}に露台で国民に顔見せをすればいいとのことだった。

「これなら、わたしでも大丈夫そうだわ」

ガルディアなどでは馬車で街中まで顔見せをするらしいのだが、ハーメイはそうでなくて良かった。

それに期間も短いこともあって、各国の賓客を招待しての舞踏会も開かないらしい。

それは、長いことそういう機会に恵まれていなかったアイシャには大変ありがたかった。

アイシャにとっては婚礼が慎ましやかに行われることは、とても望ましいことだったのである。

そして、これからハーメイの習慣についても教師について習わなければならぬ。

忙しい日程だが、密かに愛するルドガーに拒絶されたことを一時でも忘れられるかと思うと、アイシャにはありがたかった。

——あの方とはもうお別れね。

でもこれで良かったのかも知れない。

この忙しきできっともう彼と会うこともなく自分は他国へと嫁ぐのだ。

そして、アイシャのその思い通りに、それからルドガーとは会うことはなく、程なくして彼女は唯一信頼できる侍女のライサと共に隣国のハーメイへと入国したのだった。

アイシャとライサは宮廷魔術師の移動魔法でハーメイ王宮へ婚礼の三日前に入った。

その時に国王のカルラートと顔を合わせたアイシャは、彼がルドガーに負けず劣らず若い王だったので驚いた。

てつきり父親ほどの歳の王と婚礼を挙げさせられると思っていたのだ。

しかし、目の前のカルラートは秀麗と言っても過言でない程美形だった。

そして淡い金髪と深い青の瞳はハーメイ王族特有のもので、肩を覆う程の髪の後ろを紐で簡単に一括りにしていた。

「トウルティエル王妹アイシャでございます。この度のお話はわたくしには身に余る幸せでございました。これからどうぞよろしくお願い申しあげます」

「……ああ」

恭しく礼をしたアイシャにカルラートは気のない返事をした。

そのことが多少心に引っかかったが、周囲の冷たい対応に慣れて

しまっていたアイシャはその後の忙しさに、それをすぐ忘れてしまった。

着いてすぐに衣装の細かい直しや、婚礼の儀の段取りの説明などが待ち受けていたからだ。

その間もカルラートはアイシャの様子を見に来ることもなかった。ライサなどはこぼしていたが、アイシャ自身はそれほど気にならなかった。

これは政略結婚だと痛いほどよく分かっていたからである。

そして三日後、王家同士の婚礼にしては慌ただしくその儀が執り行われた。

カルラートとアイシャは婚礼の誓約書に署名をすると、露台へ出て、ハーメイ国民への披露も済ませた。

……これで、婚礼の式典はあっさりと終わった。

しかし、アイシャは慣れない環境もあって、かなりの疲労を覚えていた。

夜の支度をされたアイシャは寝室に通されると、疲労のため、ついうとうとと眠りそうになってしまった。

しかし、今夜は初夜だ。

夫であるカルラートを待たずに眠ってしまったてはまずいとライサにさんざんお説教をもらって、アイシャはどうにか起きていた。

「アイシャ様、本日は誠におめでとうございます。わたくしはこれで下がらせていただきますわ。それでは明朝参りますので」

ライサがそう言って、王妃の間を去っていく。

それを心細く見送って、アイシャはカルラートの訪れを待つ。

——これで、わたしはあの方の妃となるのだわ。

心の中には別に愛する人がいたが、その方はもう遠い。

もう心を決めて、カルライト王を愛せるように努めよう。

しかし、そのカルライトが寝室に来る気配は一向になく、アイシヤは夜が明けるまで寝台の上でこみ上げる空しさを噛みしめていた。

08 抗議への要求

カルラートの訪れがなかったことは、明朝すぐにライサの知るところとなった。

大国の姫がたとえ国王としても、小国にないがしろにされて、ライサは激怒した。

誰からも見ても、アイシャは美しく可憐な姫だ。

そんな姫を新婚初夜に放っておくなど、ライサには信じがたかった。

それも、幼い頃から仕えてきた姫——それで、ライサの怒りは頂点に達したようだった。

それでも彼女は侍女の鑑らしく、アイシャの支度をいつにもまして美しく見えるように丹念にした。

そして、アイシャが王妃の間で、新婚とは思えないほど一人寂しく朝食を取った後に、ライサは行動に出たのだった。

「ねえ、待って。待ってちょうだい、ライサ」

肩を怒らせて王妃の間から王の間を通り抜けていくライサにアイシャは必死にすがりつく。

長年のつき合いから、ライサがかなり怒っていたことは分かっていたが、まさかハーメイ国王に直訴に行くとは思ってもおらず、アイシャは焦って腹心の侍女を止めようとした。

「なぜでございますか。アイシャ様を初夜にひとりで捨ておかれるなど、わたくしにとってこれほどの屈辱はございません」

「わたしなら平気だから。ライサ、陛下に直訴するのは思いとどまっ
て！」

トゥルティエールの侍女の中でも比較的高い位置にいた彼女に、カルラートがそれほど重い罰が与えるとは思いたくはなかったが、万が一ということも考えられる。

「アイシャ様、あいにくとわたくしは平気ではございません」

カルラート王の所行は、アイシャを見守り、支えてきたライサのこれまでの誇りをいたく傷つけたようだった。

ライサが今までどれだけ自分を大事にしてくれていたか、アイシャは改めて認識して、思わず彼女を掴んでいた腕を放してしまった。その間にライサは王の執務室の扉を開け、さっさと中へ入ってしまった。

「ライサ！」

アイシャは慌てて、自分付きの侍女を呼び止めたが、彼女は振り返らなかった。

「失礼いたします、陛下」

ライサとアイシャが突然執務室に入ってきたため、カルラートと宰相はあっけに取られていた。

「……陛下に直談判しとうございます。申し訳ありませんが、宰相様は席をお外してください」

「……しかし……」

「お外してください」

有無を言わせない口調で言ったライサに、宰相は助けを求めるようにカルラートを見る。

カルラートは溜息をつくと言った。

「オルグレン、外せ」

「はっ」

カルラートの言葉に、オルグレンはそそくさと執務室を出ていった。

その顔は、修羅場に関わらずに済んで、ほっとしたような顔をしていた。

「……さて、わたしは忙しい。手短に頼む」

ライサ達が乗り込んできた理由を痛いほど理解しているカルラートはいくらかうんざりしたように言った。

その様子に、ライサの頬がひくひくと痙攣する。

「では言います。陛下、昨夜姫様にお手を出されなかったのはどういうことでしょうか？」

客観的に見ても、アイシャは顔も体も美しく、そしてその心根は優しい。

そんな姫君を新婚初夜に放っておくなど、他の男性だったらきつと考えもしないだろう。

「……わたしは一方的に押しつけられたこの婚札に最初から反対だった。威圧的に大国の姫を小国にやるのだから感謝しろとまで言われて反発しない者がどこにいる？」

「陛下が、いえ兄がそんなことを……」

初めて知らされた事実、アイシャは口を覆った。

そんな書簡を送られたのなら、この王の反発は分かる気がする。ましてや、彼は一国の王なのだ。

たとい小国とはいえ、彼の、いやハーメイの誇りを傷つけるのは充分だ。

……もしかして、ルドガーは、アイシャが嫁ぎ先でもうまく行かないように、そんな文面をカルラートに送ったのかもしれない。

だが、真相はルドガーしか知らないことだ。

戸惑うアイシャをカルラートは見やると、どこか意地悪そうに笑った。

「それにそなたは先の第二王妃の連れ子だそうだな」

「は、はい」

この話は国外にまで知られているのだろうか。

確かに、連れ子を持つ母のクリステイナがその座に収まった時は、トウルティエール王宮は大混乱だった。そんな理由があったので、あまり外聞の良くない情報が各国に知られていても確かに不思議ではないのかもしれない。

「かなりの美貌の踊り子の娘だと聞いたぞ。そなたも、さぞ閨術にも通じているのであろうな」

「な……」

カルラートのあまりの言葉にアイシャは絶句する。

……確かに、他の流れの一座などは、生活のために王侯貴族に体を売ったりもしていたらしいが、母のクリスティナの一座は、純粋にその芸で身を立てていたのだ。

母はその美しさで、先代のトウルティエル王に愛されたが、そんな恥知らずな真似をしたことは一度としてない。

もちろん、そんな母に育てられたアイシャがそんなものに通じているわけもなかった。

「なんということをし！ アイシャ様は清廉潔白なお方です！」

あまりの言われようにアイシャは頬を赤らめて反論しようとしたが、その前にライサに口を挟まれた。

「侍女、おまえはうるさい。少し黙っている。……今わたしはこの姫と話している」

アイシャは、カルラートの『姫』という言葉が引っかけた。

昨日、婚礼を挙げて王妃となったはずだが、彼はどうやらそのことを認めていないらしい。

「……陛下はわたしを妃とは思ってくださらないのですね」

アイシャが真っ直ぐにカルラートを見つめ言うと、彼は少々意外そうに眉を上げた。

「ああ、思っていない」

「……そうですか。けれど、わたしもトウルティエルの王妹として嫁いできたのです。そう簡単に引き下がるわけには参りません」

どこまでも真摯にアイシャはカルラートに向き合っていた。

ずっと周りに遠慮しながら生きてきたアイシャが、こうやって人に真っ向から話し合うのはライサ以外では久しぶりであった。

しかし、カルラートはアイシャとしばらく視線を合わせた後、腹を抱えて笑いだした。

「な、なにがおかしいのですっ」

真剣に向き合ったのに失礼な態度で返されて、アイシャは真っ赤になって抗議した。

「……王妹か。これが笑わずにいられるか。トゥルティエールの王は王妃も据えず、血の繋がらない妹と睦み合っているともっばらの噂だ」

「！ そんな噂、嘘です！」

思ってもいなかった言葉に、アイシヤは叫ぶ。

——それどころか、彼には憎まれているというのに。

それが睦みあっているだなんて、どこから出た噂なのだろう。…
…なんにせよ、とてつもない誤解には違いない。

「……どうだかな。わたしに妃と認めさせたいのなら、それを信じさせてみる。……できないのなら諦める。わたしとて、清らかでない姫とそんな関係になる気はない」

自分の身が清らかなのは明らかだ。

……けれど、どうやってこの王にそれを信じさせればいいのだろうか？

カルラートと結ばれば、その疑いは晴れるだろうが、彼にはその気はない。

アイシヤはどうしていいか分からずに、その場に佇んだ。

「……この話はこれで終わりだ。二度とこの話題を出すな。出すなら、わたしが納得できる答えを持ってこい」

絶句するアイシヤに、話にならないとばかりにカルラートが首を横に振る。

そして、カルラートに命じられた近衛兵に連れられてアイシヤとライサは王妃の間に戻らされた。

「陛下はトゥルティエールのやり方にかなりご立腹の様子でしたわね。……あれを覆すには少々難しいかも知れません」

初めはカルラートに憤っていたライサも、ことの次第を聞いて彼

の気持ちもそれでは仕方ないかも知れないと、理解したようだった。しかし、悪いのはそんな書面を出したルドガーでアイシャにはなんの非もない。

王妃の間で沈む込むアイシャの気持ちをなんとか高揚させようと、ライサは彼女に各国で話題の恋愛小説を差し出した。

現実世界で愛されないのなら、せめて想像の世界だけでも彼女に幸せな気分になって欲しいと願ったからである。

アイシャはそんなライサの気持ちが嬉しく、それを受け取って読書にいそしんだ。

ただ、そんなやりとりがあったその夜も、もちろんカルラートの訪れはなかった。

アイシャはそのことを既に覚悟していたので、その夜に安眠できたことは、彼女にとってはそれでも幸せなことだったかもしれない。

09 ルドガーの想い

——トウルティエール城、王の執務室。

そこでルドガーは魔術師であるライノスから報告を受けていた。

王太子になる前からのルドガーに付いていたライノスは、アイシヤがカルラートに嫁する少し前からハーメイへの密偵となっていた。「……それで、結局アイシヤはハーメイ国王に手を出されていないわけか」

不快そうに眉を寄せてルドガーが再度確認する。

あの美しいアイシヤを前にして手を出さないなどは、彼女を密かに愛しているルドガーには、にわかには信じがたかった。

「はい。そのことを知ったライサが勢い込んでハーメイ国王に抗議に行っておりました。……しかしハーメイ国王はこの国の決定に対してかなりの反発を覚えているようです」

確かに己の迷いを振り切るために、かなり強引にアイシヤの婚礼を押し進めてしまったことは認める。

そのために、大国の威を振りかざしたことも。

しかし、それをしたのはトウルティエール国王である自分であつて、なにも知らないアイシヤにはまったく非はない。

「……そうか。それでは、ハーメイには己の立場を分からせてやらないとな」

冷やかな声でそう言うと、ルドガーはライノスに引き続きハーメイを見張るようにとの指示を出した。

ライノスが移動魔法で消えるのを見届けると、ルドガーは大きく息をついて、椅子に身を預けると片手で顔を覆った。

その脳裏に浮かぶのは、灰桜色の髪の可憐なアイシヤ。

ハーメイ国王との婚礼の決定を告げた時の彼女の驚いた表情が思い浮かび、ルドガーは狂おしい感情に苛まれる。

表面上は冷たく接していたものの、次第に女らしく美しくなっていく愛らしいアイシャに、ルドガーは強い愛情を感じていた。

いっそ自分のものにしてしまおうかと思ったのは一度や二度ではない。

できることならば、ハーメイ国王の元になどやらず、アイシャを自分の妃にしてしまいたかった。

しかし、先王の寵愛を受けた第二王妃の娘のアイシャは自分の母の敵である。

それまで先王に尽くしてきたというのに煙たがれ、無念に死んでいった母を思うと、いくら血が繋がらないとはいえ、アイシャを妃にするわけにはいかなかった。

それに、自らがアイシャに冷たく当たるようになったことで、彼女がこの王宮でかなり不憫な状況に置かれていることをルドガーは理解していた。

彼女に嫌がらせをしていた者は、秘かに罰したり解雇したりはしていたが、それでも周囲のアイシャへの仕打ちは変わらなかった。

——少しでもアイシャに優しくしてやれば、周りの対応は変わっただろうか。

ルドガーはたまにそう思わないこともない。

しかし、母の死以後、冷たく接していたものを急に翻すことも彼には出来なかったのである。

彼にとって、アイシャは長いこと愛しくて憎い姫だった。

そして、ことさら憎いと思うことを自分に課してきた。

だが、徐々に愛が憎しみに勝るようになってきて、ルドガーは苦しんだ。

愛している。愛している。愛している——。

だが、今更態度を覆してどうするというのか。

それでは無念に死んでいった母があまりにも気の毒というものである。

それに、アイシャも態度にこそ出さないが、内心では辛く当たる自分を嫌っているだろう。

それを考えると、ルドガーは言いようもなく狂おしい気分になった。

ルドガーは、アイシャの成人時にトゥルティエールの大貴族の元へ降嫁させることも考えた。

だが、きつと自分はその臣下を見る度に愛しいアイシャをその手にしていることをきつと思ひ起こしてしまうだろう。

それで国内の政務を取ることが出来るのだろうか。

想像ではあるが、もしアイシャが降嫁した場合、最悪嫉妬からその貴族を無下に扱ってしまうことも考えられる。

それは、王としてどうしても避けたいことだった。

そんな思いを二年ほど繰り返しながら、ルドガーはここまで来てしまった。

既に妃を娶っていてもおかしくない歳ではあったが、アイシャへの想いからどうしてもそうする気にはなれなかった。

そうするうちに、アイシャはますます美しくなり、ルドガーは内なる己の欲望を隠しきることが困難になってきた。

それで今回の苦渋の選択である。

アイシャを他の国に嫁にやっつけてしまえば、その姿を見ることはなくなる。

そうすれば、もうアイシャを欲しながら、拒絶しなくても済むのだ。

愛しいアイシャを他の男に渡すのは苦痛以外の何物でもなかったが、彼女のことを思えばそれが一番良いことのように思えた。

居心地の悪いトゥルティエール王宮よりも、他国の妃にいる方が

余程周囲に大事にしてもらえるだろう。

そこでルドガーは、この国に対しては立場の弱い小国ハーメイの国王に嫁がせることに決めた。

ハーメイはトゥルティエールの意向には逆らえない。それをルドガーは利用したのだ。

しかしその強攻策は、どうやらルドガーと歳が変わらないまだ若い王の逆鱗に触れたようだった。

そして、トゥルティエールへの反発を愛しいアイシャに向けた。

あのハーメイ国王は、初夜の花嫁に手を着けないという暴挙に出たのだ。

——他国、それもこの大陸一の小国に嫁した姫にはさぞかし屈辱だったことだろう。

しかし、この王宮で様々な嫌がらせを受けても、苦情一つ漏らさなかったアイシャだ。ハーメイ国王のこの非情な仕打ちにも健気に耐えていることは想像に難くない。

「——なんとか対策を講じねばならないな」

そんなハーメイ国王に、愛しいアイシャの身を委ねるのは癪だったが、彼女の幸せには代え難い。

彼女は今まで哀しい思いをしていた分、いや、それ以上に幸福になるべきなのだ。

「……思い上がるのもこれまでだ。ハーメイ国王、カルラート」

ルドガーは憎々しげにそう呟くと、己の国王就任時に一度だけ会ったきりの優しい容貌のハーメイ国王を思い起こしていた。

もっとも、あの時はカルラートは王太子であったが、その美しい顔立ちは王宮でも話題であったのでよく覚えている。

五年前でもそうであったのだから、いまはさぞ秀麗な青年になっ

ているだろう。

——もしかしたら、アイシャもかの王に想いを寄せるかもしれないな。

そう思うと、嫉妬で狂いそうではあったが、これもすべて彼女のためだ。

そして、自分ではなく、あの男がアイシャの純潔を奪うのだ。

ルドガーはしばらく空中を睨んでいたが、やがて机上のペンを取り、ハーメイ宛の書簡をしたため始めた。

10 大陸の内情

「トウルティエールから書簡が届いたのだと？」

ハーメイ国王の執務室で、カルラートは聞きたくもない名に思わず顔をしかめた。

「はい、それも王直筆の物のようです」

宰相のオルグレンが困惑したようにその仰々しい箱に収められた書簡をカルラートに手渡した。

その書簡の内容に目を通したカルラートは忌々しそうにそれを放った。

「陛下、またそのようにトウルティエール国王の書簡を乱暴に扱っては――」

「これがありがたがるような内容であればそうするがな」

それは、「嫁がせた王妹と寝所を共にしていないという報告を受けたが、どういうことだ。トウルティエールに恥をかかせる気か」という、叱責の文面だった。

この短期間でそれを知らせるのは、アイシャ付きの侍女では無理だろう。

カルラートは意図してアイシャに魔術師を付けてはいなかった。

今回の件をトウルティエールに早々と知らされてはいろいろと面倒だからだ。

とすると、これはどう考えても密偵の報告だと思われた。

この王宮に各国の密偵が入り込んでいてもおかしくはないとカルラート自身思っているが、こうも堂々とそれを記してくるとは恐れ入る。

カルラートはオルグレンにその書簡を渡すと、それを読んだ彼は顔を青ざめさせた。

「へ、陛下、アイシャ様と寝所を共にしていないというのは誠なの

ですか？」

「ああ、まだ一度も共にしていない」

こともなげにそう言うカルラートに、オルグレンは倒れそうな顔色で叫んだ。

「陛下、それはまずすぎます！　かの国の機嫌を損ねてはこの国の立場が危うくなります」

……確かにオルグレンの意見はもったもなものだ。

このハーメイが二つの大国に挟まれている小国であるにも関わらず今まで消滅しなかったのは、ひとえに両国の温情故に他ならないのだ。

その一つの国に睨まれるのは、個人的意見はともかくとして、国王としては避けたかった。

——しかし、である。

「……確かにトゥルティエールの心証は悪くはなるだろうが、この大陸にガルディアがある限り戦だけにはなるまい」

「それはそうですが……」

オルグレンは、ガルディアの名を聞いて、不承不承頷いた。

それくらいガルディアという大国は、この大陸では特殊かつ、偉大なのだった。

ハーメイは、この大陸一の領土を誇る魔法大国のガルディアと、その昔、大きな戦になりかけたことがある。

とはいっても、もう二百年も前の話になるが、二代に渡る時の王達が伝説の美女と言われた姫君に恋をして、国境沿いを攻撃し、姫を無理矢理城から浚うという暴挙を犯したことがあった。

しかしそれは、圧倒的な戦力のあるガルディアの勝利で姫を救出したという結果に終わった。

自国のこととはいえ、その話を聞く度に時の王達はとんでもない

馬鹿者かと思ってしまう。

おかげで長い間、ガルディアから自国の特産品である織物や金細工などの関税で苦しめられたのだ。

主に特産品で成り立っている小国で、これほどの罰はあるまい。

この国の王として、その時の王に愚痴くらい言いたくなくても仕方ないだろう。

しかし、そんな強大な戦力を持っているガルディアは無駄な戦闘を嫌う傾向にある。

それ故に、ハーメイはその時に滅ぼされていても不思議ではなかったのだが、かの姫君の口添えもあって、未だに存続を許されている。

そういうわけで、ガルディアの強大な戦力がある故に、この大陸は大きな戦にみまわれることがないのであった。

それは大国であるトゥルティエールにも言える。

トゥルティエールからしたら、元々自国領だったハーメイを取り返したいことだろう。

しかし、そうすることはガルディアにいらぬ警戒をさせることを意味する。

——大国のトゥルティエールでさえ、ガルディアの戦力の前には赤子も同然。

それが各国の代々の王の総意だった。

しかし、このままアイシャの元を訪れないということは無理であろうな、とカルラート自身も感じていた。

威圧的なトゥルティエール国王の態度には、カルラート自身納得できかねるものがあるが、大国に睨まれるのはやはり小国としてはいろいろと都合が悪いのである。

「陛下、すぐにもかの国に詫び状をお書きください。そして、今夜必ずアイシャ様の元を訪れにしてください。そうすれば充分間に合います」

悲壮な顔でそう訴えるオルグレンを渋い顔で見ながらカルラートは仕方なく頷いた。

「……やはり、そうしないと駄目だろうな」

なんと言っても、大国の王直々の苦情なのだ。無視するわけにはいかなかった。

カルラートが仕方なくトゥルティエル国王への詫び状をしたためていると、オルグレンがふと思いついたように言った。

「陛下、アイシャ様とかの国に贈り物をするのはどうでしょう。我が国の織物と刺繍、金細工は他国をしのぐものですし」

「……なにもそこまであの国の顔色を見なくても良いのではないか」
気乗りのしないカルラートをオルグレンが目の色を変えて諫めにかかってきた。

「なにをおっしゃいますか、陛下。しておいて損をすることはございません。これでかの国王の機嫌が直るのならば安いものです」
結局オルグレンに折れる形で、カルラートは双方に贈り物をすることにした。

——しかし、問題は夜の方だ。

このまま大国を恐れて、アイシャと寝所を共にするのは癪に障る。
……いや、寝所を共にしても、ようは抱かなければいいのだ、とカルラートは思い直し、心の中でほくそ笑んだ。

「アイシャ様、大変でございます！」

ライサの叫びに何事かと驚いてアイシャは彼女に目を向ける。

「陛下から贈り物が……っ」

ライサの口から出たのがあまりにも意外なことだったので、アイシャは思わず口にしてしまう。

「……嘘でしょう？」

「いえ、それが誠にございます」

そう言って、ライサは二つの箱を差し出してきた。

一つは小さな箱、もう一つは平たい箱だった。

アイシャがなにかしらと思って箱を開けてみると、中には金の細工が見事な腕輪と、繊細な柄がとても美しい織物が出てきた。

「まあ、なんて綺麗……」

アイシャが思わず目を奪われて眩くと、ライサは少々興奮したように言った。

「これはきつと、陛下の気が変わられたという意味の贈り物ですわ。ええ、そうに違いありません」

「そ、そうかしら……？」

ライサの勢いに押されて、アイシャは少しばかり身を引いた。

「そうです。きつと、今夜にでも陛下の訪れがありますわ。アイシヤ様、わたくしとても喜ばしいですわ！」

「そ、そう……」

カルラートに抱かないとまで言われたアイシャにはそうは思えなかったのだが、ライサが喜んでいる姿を見たら、とてもそんなことは言えなかった。

それにしても、カルラートのこれはいったいどういった心境の変化なのだろうか。

もしかしたら、ルドガーあたりに彼に妃扱いされていないという報告が行ったのかもしれないとアイシャは思った。

内情はどうであれ、大国の王妹として嫁いだのだ。

トゥルティエールとしては恥をかかされたも同然だろう。

ハーメイとしては、それを宥めすかすためにこのような贈り物をしたのかもしれない。

「アイシャ様、せっかくの陛下の贈り物なのですし、つけてみてくださいませ」

そう言っ、ライサが腕輪をアイシャの左手に通す。

それにしばし見とれてからアイシャは微笑んだ。

「……本当に綺麗ね。後ほど陛下にお礼を申し上げます」

「そうでございますね。今夜にでも申し上げるのがよろしいでしょう」

ライサの中ではすっかり夜にカルラートが訪れることが決まっているらしい。

アイシャはそれに曖昧に笑ってごまかしながら、いつカルラートに贈り物の礼を言おうかと考えていた。

11 寢所にて

しかしその夜、アイシャの思いもかけないことが起こった。

ライサの言った通り、カルラートが寢室に現れたのだ。

「陛下？ どうしてここに……」

アイシャは取り乱してライサの姿を探すが、これから睦みことになるかもしれないこの場に彼女がいるはずもなかった。

「周りの目がうるさいからな。……だが、寢所は共にしても、そなたは抱かない」

「そ、そうですか……」

カルラートのはっきりとした宣言に、もしかしてと少しでも期待してしまった自分をアイシャは恥じた。

そうこうするうちに、カルラートはさっさと寝台に横になってしまったので、アイシャは少し呆然としてしまった。

「……なにをしている。さっさとここに来て寝るんだ」

カルラートに言われて、アイシャは顔を赤く染める。

いくら手を出さないと言われていても、男性と同じ寢室で眠るというのは、いまだ乙女であるアイシャにとってはかなり恥ずかしいことであった。

しかし、いつまでもためらっていても仕方がない。アイシャは意を決して、「失礼します」と断って寝台に横になった。

……対外的には夫婦であるにしても、寢所を共にしているのがとてもはしたないことに思えて、アイシャは赤面し、緊張から身を堅くしていた。

「そなたはもう少し端に行け。わたしもそうする」

「は、はい」

カルラートがそう言ったことによって、二人の距離が遠ざかり、アイシャは少しほっとした。

本来ならカルラートに手をつけられないことは、大国から嫁いで来た者としては恥ずべきことなのだが、この時のアイシャはなぜか安心してしまっていた。

——それは真に愛する人が心にあつたからかもしれない。

そして、出来る事ならばその方と結ばれたいと、叶わぬ夢をアイシャはいまだに願っていたのである。

「……そういえば、贈り物ありがとうございました」

ふいにアイシャは昼間のことを思い出して、カルラートに礼を言う。

あの金細工の腕輪と織物は美しく、アイシャ用に厳選されたものだと確かに感じ取れた。

それに対して返ってきたのは、ああ、というそっけない言葉だった。

それで彼がそのことにあまり乗り気ではなかったことがアイシャには分かった。

あれはきつと宰相の勧めで仕方なく送ったのだろう。

カルラートの冷淡とも思えるその言動から、アイシャは抱かないという彼の言葉を信じて、すっかり安心しきってしまった。

先程まであれだけ羞恥を感じていたというのに、我ながらおかしいものだ。

それに、本当は彼に抱かれることが自分に課せられた責務なのに――。

そう考えているうちに強烈な眠気が襲ってくる。

ここどころ、カルラートの訪れを待っていて、あまり眠っていなかったのだ。

「陛下……」

できれば隣で横になっているのはあの方であつたら良かったの
に思いながら、アイシャは深い眠りに身を任せていった。

「陛下？ どうしてここに……」

その夜、寢室を訪ねたカルラートにアイシャは相当驚いたよう
で、おろおろとうろたえていた。

その様子がまるで小動物のようで、カルラートは思わず笑つて
しまう。

「周りの目がうるさいからな。……だが、寢所は共にしても、そ
なたは抱かない」

「そ、そうですか……」

そう言つたアイシャのどこか諦めたような瞳にカルラートは良心
の呵責を覚えた。

元々、癪に障るのは大国の威を振るうトゥルティエール国王であ
つて、アイシャではない。

彼女自身はとても可憐で美しく、求婚者が山といへも不思議では
ない姫君だとカルラートは感じていた。

しかし、ここまで来たら半ば意地のようなものだった。

カルラートはさっさと寢台の上に掛け布を被つて寝転がった。

「……なにをしている。さっさとここに来て寝るんだ」

カルラートの突然の行動に戸惑つた様子のアイシャを呼ぶと、彼
女は「失礼します」と言つておずおずと寢台に横になった。

その途端、彼女からなんともいえない甘い香りがして、カルラー
トは一瞬理性を放り出しそうになってしまった。

ましてや、可憐で美しい姫が体の線も露わな寢間着姿でいるのだ。
彼とて若い男性なのだし、そうなくても無理はないだろう。

「そなたはもう少し端に行け。わたしもそうする」

「は、はい」

素直に寝台の端に寄ったアイシャにカルラートは息をつきながら、これからの難題に思いを馳せていた。

——これは、眠れない夜になりそうだな。

そして、その心配は現実のこととなるのであった。

アイシャとカルラートが初めて寝所を共にした翌朝。

カルラートはかなり不機嫌な様子で執務室に現れて、宰相のオルグレンを驚かせた。

「陛下？　どうなされたのです。昨夜はアイシャ様と寝所を共になされたではありませんか？」

オルグレンは、それなのになぜ不機嫌なのかという表情だ。

「……寝所は共にした。だが抱いてはいない」

そう言って、執務机の椅子にどざりと腰を下ろしたカルラートにオルグレンは目をむいた。

「陛下、つまらぬ意地をはるのはおやめください。それは寝所を共にしないことよりも、アイシャ様にとっては屈辱的なことです！

なにより、このことがトウルティエールに知れたらどうなさるんです！」

「うるさい、怒鳴るな。……昨夜は一睡もしていないんだ」

オルグレンからの叱責に、カルラートは不快そうに眉を寄せる。

それでもなお、オルグレンは呆れた様子を隠しもせずに続けた。

「自業自得です。陛下が眠れなかったのは、魅力的な女性と寝所を共にして、しなくてもいい自制をなさったからでしょう。やせ我慢も大概になさってください」

「……やせ我慢などしていない」

「ではなぜ一睡もしていないなどとおっしゃったのですか。アイシヤ様を気にしておられなければそんなことにはならないと思われるすが」

鋭すぎるオルグレンの言葉に、カルラートは思わずぐっと詰まった。

確かにオルグレンの言う通りだった。

昨夜は隣に眠るアイシヤの存在が気になって一睡もできなかった。お互いに寝台の端と端に寄って、なんとか最悪の事態だけは避けられたと思ったが、ふとアイシヤが漏らした「陛下……」という言葉に強く心を揺さぶられた。

その切なげな響きに、思わずアイシヤの方を向いてしまったカルラートは、その直後それを後悔した。

カルラートを誘うかのように薄く開いたアイシヤの唇。

掛け布越しでも分かる女らしく柔らかな曲線を描いた体。

そして、先程の「陛下……」という切なげな呟き。

自分がアイシヤを抱かないことで、それほどまでに彼女が切ない思いをしているのなら、今すぐ彼女を起こして事に及んでしまおうかという衝動にカルラートはかられた。

……いや、だが駄目だ。

それでは己の言動に矛盾が生じてしまう。

カルラートはそれを避けたい一心で、魅力的に映るアイシヤから目を逸らした。

……それからは、己との戦いだった。

寝台からもう少しで落ちるほど端に寄ったカルラートだが、それでも届くアイシヤの甘い香りや、彼女が時折寝返りを打つ度に漏らす悩ましげな声が、彼を苛んだ。

……いったいこれはなんの苦行だ。

アイシャを抱きさえすれば、すべては丸く収まるというのに、カルラートはそれでもなお己を厳しく律し続けた。

そして、永遠のようにも思われた夜が明けると、カルラートはいまだ眠っているアイシャをそのままに寝室から自分の部屋へと戻った。

己の欲望に負けてアイシャを抱いてしまうという、彼にとっての最悪の事態はひとまず避けられたわけだが、こんなことを毎日続けるわけにはいかないだろう。

アイシャの元を訪れるのは三日に一度くらいで充分だ、とカルラートは溜息をつきながら思った。……これが毎日だったら、こちらの体力がもたない。

「陛下、我慢のしすぎは体に毒ですよ」

「……だから、我慢などしていないと言っているだろう。ところで今日決裁する書類はどこだ」

オルグレンに呆れと同情が混ざったような目で見られたのが癪だったが、カルラートはそれを隠すように執務に没頭した。

しかし、いつまでこんなことを続けるんだという疑問を彼自身も薄々とだを感じ始めていた。

12 説得再び

アイシャが目覚めたとき、既に寝台にはカルラートの姿はなかった。

アイシャは安堵か落胆なのか分からない溜息をつくとき、支度をするためにライサを呼び出す。

「アイシャ様、お体は大丈夫でございますか？ 陛下はお優しくされたのでしょうか？」

期待を込めて見つめてくるライサには申し訳なかったが、アイシヤは正直に事の次第を話した。

「まあっ、それでは寝所を共にしてなにもなかったと……？」

愕然としたようにライサが呟いたのに対して、アイシヤは苦々しい気分で頷いた。

あそこまで期待していたライサに応えられなくて彼女は申し訳ない気分になる。

それ以上に兄王の意向に添うことが出来なくて、なんのための王妹の身分かとアイシヤは沈みこんだ。

それでもアイシヤは、未だに清い身の自分に安堵している己自身に気が付いていた。

しかし、カルラートは兄王になにか言われて、アイシヤの寝室に本人は仕方なくでも、ともかく現れたのだ。それでなにもなかったなどと、安易に安心などしている場合ではないと、アイシヤは己を恥じた。

「それではなお、悪いではありませんか。寝所を共にして抱かないなどと、侮辱以外の何物でもありません！」

またしてもカルラートのところへ抗議に行こうとしていたライサをアイシヤはなんとか引き留めて言った。

「……陛下にはわたしが直接お話しします。このままでは、嫁いで

きた者の責務を果たせないままだもの」

王家の姫ならば本意でない結婚をする者がほとんどなのだ。

だから、たとえ心に想う人がいても、自分はそれを振りきらなければいけないのだ。

代々の姫君達は、国のためにその責務を果たしてきたのだから。

そしてアイシャはある決意をすると、カルラートの執務室へと向かった。

もしかしたらカルラートは会ってくれないかもしれないとアイシャは懸念していたが、そこは宰相のオルグレンが間に入ってくれたらしく、彼女はすぐに入室を許された。

「陛下、それではわたしは席を外しますので」

気を利かせたオルグレンが二人を残して、すぐさまその場を後にした。

その背中をカルラートはむっとして睨んだが、もちろん相手には見えていない。

アイシャは果たして彼を説得出来るのだろうかと少し不安な気持ちでその様子を見ていた。

「……それでなんの用だ」

カルラートがアイシャに向き合って、うんざりというような顔で尋ねる。

「本日は陛下にお話があって参りました。……陛下はおっしゃいましたよね、兄王とわたしがただならぬ関係でないということを感じさせてみると」

「ああ」

アイシャの言葉にカルラートがぞんざいに返事をする。

しかし、アイシャはそれを気にした様子も見せずに続けた。

「なぜそんな噂が出たのか、それ自体わたしには分かりかねます。なぜなら、それは絶対にありえないからです」

アイシャがそう断言すると、カルラートが不思議そうに首を傾げた。

「……なぜだ。血が繋がらない者同士、いつそうなっても不思議ではないではないか」

しかしアイシャにはカルラートがそう思う方が不思議だった。

血が繋がっていないとはいえ、いわば天敵である妃同士の子なのだ。それで仲が良くなる訳がない。

もしかしたら、カルラートは妃同士の争いを目にしたことがないのかもしれないのかもしれないとアイシャは思った。

「……トウルティエールの醜聞になるのでこの前は申しませんでした、わたしの母が先王の寵愛を受けたせいで、兄の母は城から身を投げたのです。そのことでわたしは兄にずっと憎まれています。ですから、わたしと兄王がそういう関係になることはまずありません」

アイシャがきっぱりとそう断言すると、カルラートは息をのんだ。

「そんなことがあったとは、我が国には知らされていないぞ」

「ですから醜聞を防ぐために箝口令をしいたのです。今も先の正妃の死因は対外的には病死となっているはずです」

……もつともトウルティエール王宮内では有名無実となってしまっているが、国としては幸いなことに、ハーメイにまでは届かなかったらしい。

「しかし、そなたをトウルティエール王が憎んでいると言っていたが、あの王はそなたと寝所を共にしていないと知って直々に抗議文を送りつけて来たぞ。それはどう説明するつもりだ」

「……それは大国の尊厳に関わるからだと思われますが。どんなに憎い者でも王妹として嫁がせたからには面目もあるのでしよう」

アイシャがあくまで真摯にカルラートを見つめていると、彼は少し息を付いてから言った。

「……そうか。ならばその噂があり得ないことも理解した」

「！ 誠にございますか！」

これで王妹としての責務が果たせるとアイシャが喜んだのもつかの間、カルラートは片手を前に出して彼女を制した。

「慌てるな。まだ話は終わっていない。しかし、わたしは威圧的に話を進めたあの王のやり方が気に入らない。……だが、そなたがそれを謝罪するのなら許してやろう」

それは、カルラートにとっては破格な扱いだったのだろう。アイシャにもその彼の思惑が理解できて息をのんだ。

ここで謝罪さえすれば名実共にハーメイの王妃になれるのだ。なにを迷うことがあるだろう。

しかし――。

「――申し訳ございません。それはできかねます」

少しばかりの逡巡の後、アイシャの口から出てきたのは断りの言葉だった。

カルラートはアイシャが謝罪するものだと思っていたらしく一瞬絶句する。

「なぜだ、ここでそなたが謝れば、すべてが丸く収まるのだぞ」

「兄が決めたことは国が決めたことです。それなのに王妹であるわたしが勝手に謝罪してしまえば、トウルティエールの権威は地に墜ちてしまいます。ですから、わたしにはできません」

たとえ血は繋がっていなくても、自分は王妹。トウルティエール王族として、アイシャは王の決定を無視して謝罪することがどうしてもできなかった。

アイシャが昂然と頭を上げてそう言うと、カルラートは信じられないものを見るような目で見てきた。

「……そなたは、かの王に憎まれていると言っていたが、そなた自

身は随分とかの王を信頼しているのだな」

ルドガーは自分には冷たいが、成人前から取り仕切っていたその政務は、素晴らしいものであると、トゥルティエール宰相のディルスは言っていた。

ライサから聞いた話でも、国民達も彼を賢王と褒め讃えているらしい。

「はい、王として尊敬しております」

アイシャがカルラートから目を逸らさずに告げると、なぜか彼は苛立ちを表情に表した。

「――大国の権威を笠に着るあの男のどこがいいんだ」

それはごく小さな呟きで、アイシャにはよく聞き取れなかった。

「はい？ なにかおっしゃりました？」

アイシャが聞き返したが、しかしカルラートは彼女から目を逸らして無言で通した。

「――とにかく謝罪がないのなら、わたしはそなたを抱かない。心しておけ」

「そんな、それでは話が違います。前には噂の内容を嘘だと信じさせればいいとおっしゃっていたではないですか」

アイシャはドレスのスカートを思わずぎゅっと握りしめてしまいがら、カルラートの理不尽な言い分に抗議する。

「気が変わった。そなたがかの国のやり方を謝罪すれば、いくらでも抱いてやろう」

「！ 馬鹿にしないでください！」

くつくつ笑いながらのカルラートのその言葉に、アイシャは真っ赤になって叫ぶと、衝動的に執務室を飛び出していた。

13 花々の咲き乱れる庭園へ

——存外、あの姫は気が強い。

カルラートはアイシャの先程の叫びに、少々呆然としていた。

彼女の可憐な容姿から、気の弱そうな感じを受けていた。しかし、今のやりとりでアイシャが本当は芯が強いことにカルラートは気が付いた。

いくらでも抱いてやるという言葉は、彼女の誇りをかなり傷つけたかもしれないな、とカルラートはアイシャが出て行った扉を見つめながら思う。

……確かにあの言葉は我ながら酷すぎた。

あの姫は今、さぞ怒っていることだろう。

そう思うと、カルラートはなぜかいてもたってもいられなくなり、執務室を飛び出した。

カルラートの執務室から出たアイシャは、とぼとぼと自室へと戻ってきた。

衝動的に出てきてしまったが、もっと冷静になって話し合うべきだったかもしれない。

そうは思ったが、もう後の祭りだった。

「アイシャ様、陛下とのお話はとうだったのでしょうか？」

出迎えたライサがアイシャの顔を見て、うまくいかなかったのを察したようではあったが、それでも念のためか聞いてきた。

「……駄目だったわ。兄とただならぬ関係ではないということは納得して頂いたのだけれど、今度は今回の婚礼を威圧的に進めてきたのを謝罪しろと言われたの」

「……それで、アイシャ様はお断りになられたのですね？」

消沈しているアイシャの様子から、ライサは彼女がなんと答えたか理解したらしかった。

「ええ。兄王の決定を謝罪するわけにはいかないもの」

アイシャが頷いてライサの言葉を肯定する。

大国から嫁いで来たものとして、あの答えは正しかったとアイシヤは思っている。

しかし、そのことで形だけの王妃のままでいることが決まってしまったのは、痛い事実だった。

それでも、ライサは微笑んで頷いた。

「それでよろしいのです。アイシャ様がそこで謝罪してしまわれれば、トウルティエールの威信にもかかわるでしょうから」

「ええ……」

ライサに自分の考えを肯定されて、アイシヤはいくらか気分が浮上したものの、それでもこれからのことを思うと気が重かった。

それから少しして、アイシヤの居室にいきなりカルラートが現れた。

王の間と王妃の間は繋がっているため、双方で行き来が可能なのだが、それでも突然のことでアイシヤは驚き、息をのんだ。

「あ、あの……」

いったいなんの用だろうと思っていると、カルラートはおもむろに口を開いた。

「……ここの庭園を案内しようと思ってな。聞いたところによると、そなたはまだ目にしていけないらしいからな」

さきほどアイシヤを抱かないと言ったばかりなのに、いったいどのような心境の変化なのだろう。

もしかしたら、宰相あたりがそうしろとカルラートに言ったのか

もしれない、とアイシャは思った。

それでも、せっかく彼がそう言ってくれているのだから、ありがたくその好意を受け取っておくべきかもしれない。

「あ、ありがとうございます」

「ああ」

アイシャが戸惑い気味に礼を言うと、カルラートは実にそつなく返事を返した。

それを聞いて、やはりカルラートは本心では庭園を案内などしたくないのかもしれないとアイシャは感じていた。

心に引つかかるものはあったが、カルラート直々に案内された庭園は美しかった。

「綺麗……」

トゥルティエールのもものと比べたら、多少規模は小さいが、それでも手入れが充分行き届いていることが窺えた。

「——気に入ったか？」

「はい、とても」

アイシャがにこりと微笑むと、カルラートは少し瞳を見開いた。

「そ、そうか。それならば、今度からここを訪れるといい。少しは退屈しのぎになるだろう」

「はい、ありがとうございます」

なぜか少々挙動不審になったカルラートをアイシャは不思議に思いつつも、彼に礼を述べる。

……もしかして、気を遣ってくれたのかしら。

さつきはあんな意地悪を言っていたのに、よく分からない方。

アイシャは彼の矛盾した言動に少々戸惑いつつも、花々の咲き乱

れる庭園に目をやる。

その美しい光景に、慌ただしくこの国に嫁いできて、余裕のなかった心が風いでいくようなそんな気がした。

カルラートがアイシャを庭園に案内したのは、見せかけだけでも王妃として扱っているという、国内外への配慮なのかもしれないが、それでも彼がここに連れてきてくれたのをアイシャは嬉しく思った。「陛下のお気遣い、感謝いたします。わたし、ここがとても気に入りました」

アイシャが花のように笑うと、カルラートはまた少しうろたえる様子を見せた。

「そ、そうか。ならばいい。よければ少し散策するか」

「はい、ぜひお願いします」

にこやかにアイシャが笑みを浮かべると、カルラートは少し不機嫌な照れ隠しのような顔になって、こっちだと方向を示した。

それから二人は、しばらくの間無言で庭園を散策した。

いろいろ無理難題を言ってくる方だけれど、本当はそう悪い方ではないのかもしれない。

アイシャはカルラートの後を付いていきながらそう思った。

忙しいだろうに、それでも彼女に付き合ってくれているカルラートに、アイシャは既にそれほど悪い感情を持てなくなっていた。

爽やかな風が花々を揺らし、アイシャの灰桜色の長い髪をなびかせる。

その中でアイシャが美しい光景に微笑む。

その様子をカルラートが秘やかに熱く見つめていることをついぞ彼女は気がつかなかった。

14 歩み寄り

「陛下、本当にありがとうございます。あのような美しい景色を見ることができてとても嬉しかったです」

庭園を散策した後、王と妃の共同の間まで戻ってきたアイシャは、カルラートに改めて礼を言った。

「そなたが楽しめたのならいい。……アイシャ」

幾分ためらうようにカルラートに名を呼ばれて、アイシャは瞳を見開く。

「……初めてわたしの名を呼んでくださりましたね、陛下」

彼に名を呼ばれたことで、王妃としてはともかく、個人的には認められたような気分になり、アイシャは嬉しさから頬を染めて微笑んだ。

「いつまでも名を呼ばないのも不便だからな。……そなたもわたしをカルラートと呼べ」

「……カルラート様？」

「敬称はいらない。ただのカルラートでいい。あと、わたしに対して堅苦しい言葉は使いな」

国王に対してそんな言葉遣いでいいのだろうかと不安に思っただけ、アイシャがカルラートを見返すと、彼は肯定するように頷いた。

「堅苦しいのは好きじゃない。……それに、一応そなたはわたしの妃ということになっているからな」

「……本当によろしいのですか？」

トウルティエールでは王に対してそこまでできる妃は稀だ。……ただ、彼女の母だけは先王に対して対等な口を利いていたけれど。

「くどいぞ。わたしがいいと言っている」

カルラートが少しばかり不機嫌そうに言ったので、アイシャは慌てて頷いた。

せっかく、彼が気を遣ってくれたようなのに、それを無にしては

いけない。

「ええ、分かったわカルラート」

「……分かればいい」

アイシャが彼の名を呼ぶと、いくらか目元を赤く染めてカルラートがそっぽを向く。

どうやら彼が照れているらしいことに気がついて、アイシャは思わずカルラートの顔を凝視してしまった。

そうすると、不機嫌そうにカルラートが文句を付けてきた。

「……なんだ、人の顔をじろじろ見るな」

「あ、ごめんなさい。……もしかして、カルラート照れてるの？」

「照れてなどいない。妙なことを言うな」

彼に睨まれたが、その頬がさらに赤くなったので嘘なのは明白だ。だが、それを追及したら彼の機嫌を損ねてしまうだろう。

「そ、そうね。わたしの勘違いだったみたい。ごめんなさい」

しかし、相手に照れられるとなぜか自分まで照れくさくなってしまった。アイシャも頬を染めながらカルラートに謝った。

「……分かればいい。それから、これからは晚餐をそなたと共にすることにする」

婚礼を挙げてから今まで捨ておかれたも同然だったアイシャにとって、それは破格のことで驚いてしまった。

「……いいの？」

晚餐を共にするということは、これから毎日顔を合わせることだ。

彼の言葉が信じられなくて、アイシャは思わず確認してしまう。

「そなたを抱かないせめてもの罪滅ぼしだ。女にとっては相当屈辱的なことらしいからな」

どういう心境の変化か、アイシャに対してかなり歩みよってきたカルラートだったが、それだけは譲れないことのようにだった。

ああ、それはそうよね。

拒絶されていたのに、いきなりそんなに歩み寄るのはおかしいもの。

これはただ見せかけのためのものなんだわ。

アイシャが思わず溜息をついてしまうと、カルラートが尋ねてきた。

「アイシャ、わたしに抱かれないのは嫌か？」

「王妃としての務めだから。兄にも顔向けできないし」

このままでは子を成すことも無理だろうとアイシャが考えていると、その答えが気に入らなかったらしいカルラートがむっとした。

「……そうか、務めか」

ごく当然のことを言っただつたが、どうやらそれがカルラートの機嫌を損ねたらしいと分かり、アイシャは慌てた。

「あの、カルラート？　わたし、なにか気に障ることを言ったかしら？」

「……別に言っていない。それでは、わたしはこれで執務に戻る」
急に無表情になったカルラートはどこか冷たい声で告げると、王の執務室へと戻っていった。

なにか、悪いことをしてしまったみたい。……でもあの場合、なんと返したら良かったの？

わたしから抱いてほしいなんて言うのは、はしたないし。

それに心にある人のこともあってそれを伝えるのはためらわれた。アイシャは、思いもかけず王妃となる絶好の機会を取り逃がしてしまったのである。

王とその妃の共同の間に一人取り残されたアイシャは、心をざわめかせながらしばらくその場に立ちすくむ。

せっかくカルラートと歩み寄れたと思ったが、どうやら自分は失敗してしまったようだった。

アイシャは後悔したが、しかしそれでもカルラートは宣言通り晩

餐の席に現れて彼女を安堵させた。

その席での話題は、このハーメイ王宮のことについてが主だった。短期間で嫁してきたため知らないことが多数あり、アイシャはカルラートがこの話題を選んでくれて良かったと思った。

それを聞きつつ、アイシャはたとえ見せかけだけの王妃でも、この国の勉学に励んでいこうと心に決めたのである。

——ただ、その夜はアイシャの寝室に彼が訪れることはなかった。それを当然のこととして受け止めている自分がアイシャはおかしく、そして哀しくもあった。

15 ルドガーの葛藤

「……あの王は、寝所を共にしてアイシャに手を着けてないだど？」
トゥルティエール王の執務室でルドガーがライノスからの報告に眉を寄せる。

「はい。ハーメイの王は、陛下の抗議に対応する素振りをした模様です」

「……それでは、尚更状況が悪いではないか」
カルラートのアイシャへの酷い仕打ちに、ルドガーは思わず呻いてしまった。

あの美しいアイシャと寝所を共にして抱かない男がいるなど、ルドガーには想像もつかない。

いろいろと制約のあるルドガーでさえ、アイシャを手に入れたと思ったことは数知れないのだ。

それをすぐにでも手に入れられるハーメイ国王がそこまでして、彼女を抱かない理由が分からない。

「……ひょっとして、あの王には秘かに想う女でもいるのか？」
婚礼直前の報告ではそういう話は聞かなかったが、カルラートにそんな存在がいるならば、今回のアイシャへの仕打ちにまだ納得できる。

しかし、あの可憐で美しいアイシャになんの不満があるのだ、ともルドガーは思った。

「いえ、そういう存在はいないようです。……むしろあの王は寝所を共にしてからアイシャ様に惹かれているように見受けられました
が」

「なんだ、それは」
カルラートの意味不明なその行動に、思わずルドガーは呆れたような声を出してしまった。

惹かれていて花嫁に手を出さないなど、ルドガーには全く理解不

能だった。

それとも、それ程までにトゥルティエールの対応が気に入らなかったのだろうか。

——あの男が手を出さないのならば、いつそアイシャを手元に戻してしまおうか。

そんな考えが一瞬ルドガーの脳裏をかすめる。

だが彼は首を横に振ってそれを否定した。

いや、駄目だ。

一度他国へ嫁した姫を国に戻してはトゥルティエールの醜聞になる。

それに出戻ったとあれば、この王宮内のアイシャの扱いは以前よりも酷いものになるだろう。

……いやしかし、それでもわたしがアイシャを妃に迎えれば――。

そこまで考えて、ルドガーは顔を片手で覆う。

——なにを考えている。

いかに愛しかろうと、あれは母の仇の娘だ。そんなことが許される訳はない。

……だが、その当事者達はもうこの世を去って数年がたつ。

それならば、もう自分はそのことに遠慮しなくてもいいのではないか？

他国に嫁した姫を戻して妃に据えるのは醜聞にはなるが、子連れの踊り子を寵姫とした先の王の時もかなりの騒動であったのだ。今更こんなことは大したことではあるまい。

それに、アイシャ自身は手も出されず未だ清いままなのだ。

……ならば、なにをためらうことがある。

「……陛下、これは私見でございますが」

ふいにライノスが声を発した。

葛藤していて、その存在をすっかり忘れていたルドガーははつと
する。

「……なんだ」

「ハーメイ国王はトゥルティエルに反発しているが上に手を出してはいませんが、アイシャ様自身のことは愛しく思っている様子。陛下のお手を煩わせなくても、それほど待たずして、アイシャ様は名実ともにハーメイの王妃になるでしょう」

……どうやら、ライノスは先程のルドガーの様子をアイシャが無下に扱われていることに憤っていると感じたようだった。

「……それは誠か」

「はい、それはもう。姫にカルラートと呼ばせるなど、随分と親しげに話しておりました。……ですから、陛下がご心配なすることはなにもありません」

密偵自身がこうまで確信的に言うということは、よほど親密そうに見えたのだろう。

そしてあの王は、今はトゥルティエルへの反発に固執しているが、いずれアイシャへの愛しさがそれに勝ったとき、彼女を確実に手に入れる。

「……そうか、分かった。おまえは引き続きハーメイを探れ」

「かしこまりました」

胸の前で腕を掲げたライノスは礼をすると、しばらくして移動魔法でその場を辞した。

「……」

ルドガーはしばらくライノスが消えた場所を見つめていたが、おもむろに執務机に肩肘をついて、その手の甲に顎をのせて考える。

……このままなにもしないのがアイシャのためか。そしてあの王の手で彼女は幸せになるのだ。

カルラートとアイシャが幸せそうに微笑みあう幻影が見えた気がして、ルドガーは首を振ってそれを払った。

……だが、それはそう遠くない未来の情景だろう。

——あの男がアイシャを手に入れる。

そう思うと、ルドガーは自分の手でアイシャをハーメイにやったというのに、途端に激しい嫉妬にかられた。

彼女を渡したくない、と本気でルドガーは思った。

他国に嫁にやればアイシャへの想いに諦めがつく、と以前の彼は思っていた。

しかしここに来て、その考えにも陰りが出始めていた。

そして、先程考えに及んだ、彼女を国に戻して妃に据えるということがルドガーの脳裏から離れずに、彼はしばらく苦しんだのである。

16 カルラートの怒り

「アイシャ、今日はどうしていた」

――場はハーメイ、王と妃の共同の間。

カルラートがその晩餐の席でふいにアイシャに尋ねた。

「今日もあなたに昨日案内してもらった庭園に行ってみたの。あと読書して過ごしたわ」

カルラートに気にかけてもらったのをありがたく思いながらアイシャは答える。

「……そうか。なにか不都合はないか。……おまえを抱かないこと以外で」

「特にはないわ。ここの侍女は皆親切だし、とても快適よ」

それは本当のことだった。

ここハーメイの侍女は、薄々事情を感じながらも、大国から嫁してきたアイシャを大切に扱った。

トゥルティエールの王宮にいた時よりも、お飾りの王妃である今の方が穏やかに過ごせるのは皮肉な話ではあったが、アイシャは心からそう思っていた。

カルラートは自分を抱かないが、こうやって心を碎いてくれることは嬉しい。

そう考えると、大国から嫁いできた者の責務は果たせないかもしれないが、それでも良いのではないかとアイシャは次第に思うようになってきた。

今ここには、あの国の王宮のように、自分に冷たく当たる者はいない。……そして、もちろんあの方も。

アイシャはふと愛しいルドガーのことを思い出してしまい、苦い思いにとらわれた。

この期に及んでまだあの方を忘れられないなんて馬鹿みたいだわ。

……過去も、これから先も絶対に顧みられることなどないのに。

アイシャは未だに忘れられない面影を思い返しながら、そっと吐息をついた。

あのままあの王宮にいたら、いずれ兄王が妃を娶るのを目にすることになっていただろう。

そうしたら、自分は冷静でいられただろうか。

もしかしたら、憎まれているのを知っていてさえ、彼に愛を乞うてしまったかもしれない。

でも、それは禁忌。

彼の母の仇の自分はそんなことが出来るはずもないのだ。

それを思えば、カルラートのところに嫁いできたのは良かったのかもしれない。

アイシャに手を出さないというカルラート。

それ故、王妃の責務は果たせないが、心の内に兄王への愛を秘めたまま一生を終えるのも悪くない気がしてきた。

カルラートは自分を愛しているわけではないのだから、心の内に留めておくだけなら、彼への裏切り行為にはならないだろう。

ただ、正妃のアイシャに子が出来ないとすると、今後後継者の問題も出てくるはずである。

「……そういえば、カルラートはそのうちに妾妃を娶る予定なの？」

トゥルティエールでは妃を第一王妃、第二王妃などと呼ぶが、他の国では正妃または王妃、その他の妃を妾妃と呼ぶらしい。

アイシャの問いがカルラートには思ってもいないことだったらしく、瞳を見開いて彼女を見た。

「なんだ、急に」

「わたしはこのままだと子を成すことが無理なようだし、だとしたら妾妃を迎えてそうするつもりなのかしらと思ったのだけれど」

アイシャがそう言うと、カルラートはあからさまにむっとした顔を
した。

「わたしはそんなつもりはない」

「……でも、いつかは王太子を立てなければいけないでしょう？
その為には妾妃が……」

そこまでアイシャが言ったのを、カルラートが食卓を大きな音を
立てて叩いて遮った。

彼のその突然の乱暴な行為に、アイシャがびくりと体を震わせる。

「そなたはわたしが他の女を抱いても平気なのか？」

カルラートに厳しく問いただされたアイシャは戸惑いながらも、
それでも正直に言った。

「わたしは役目を果たせないかもしれないけれど、他の方が出来る
のなら、わたしはそれでもいいと思ってるわ」

「——そうか」

アイシャの返答を聞いたカルラートは、怒りを露わにして食事の
席を立った。

「カルラート？ まだ食事が途中だけど……」

「いらん」

少なすぎる食事を心配して、アイシャが気遣わしげに声をかけ
るが、カルラートはすげなく返した。

「カルラート、わたしなにか悪いことを言ったの？ だとしたら、
ごめんなさい。謝るわ」

どう見ても怒り心頭のカルラートに、アイシャはなにかまずいこ
とを言ったらしいと知って、彼に頭を下げて謝った。

だが、カルラートの機嫌は収まらない。

「ああ、言ったな。だが、今更謝っても遅い」

「え……」

そこまで彼を怒らせてしまったのかと、アイシャは愕然とする。

「カ、カルラート、ごめんなさい。許して……」

アイシャが泣きそうな顔で懇願する。

それをカルラートは去り際に見やるところ宣言した。

「アイシャ、覚えておけ。後でさんざんかせてやる」

カルラートの怒りように呆然としていたアイシャに、控えていたライサが喜色満面で話かけてきた。

「アイシャ様、おめでとうございます。これで、名実共に王妃とされるのですね」

「え……？」

ライサの言っていることが本気で分からなかったアイシャは、つい聞き返してしまう。

そのアイシャの戸惑いを理解したかのようにライサは力強く頷いた。

「陛下は今夜あなた様をお抱きになるつもりですわ」

「え、ええ……っ？」

そこで、初めてアイシャはカルラートの先程の台詞が極めて際どいものであることに気がつき、赤面した。

「そ、そんな。だって今までカルラートはトウルティエールのやり方を謝罪しなければ、わたしを抱かないと言っていたじゃない。それがどうして……」

両手で口元を覆ったアイシャは予想外の出来事に、ただうろたえる。

「きっと陛下はアイシャ様のことが好きなのですから。でなければ、あれほどお怒りになった理由が分かりません」

……カルラートがわたしを好き？

アイシャは信じられないことを聞いた気がして、瞠目した。

「で、でも、カルラートはわたしと寝所を共にしてもなにもしなかったし、それに意地悪なことも言っていたじゃない。とても信じられないわ」

アイシャが首を横に振ると、ライサは宥めるように優しく言った。「アイシャ様、人の気持ちはいくらでも変わりますわ。陛下があなた様に接する内に、次第に惹かれていったとしてもなんの不思議もありません」

「わたし、カルラートに好きになってもらうような魅力のある人間じゃないわ。……お母様のような美女なら分かるけれど」

アイシャの母親のクリスティナは派手な美女だった。しかしアイシャは実の父親の家系の顔立ちらしく、母親とはまったく似ていない。

アイシャはそのことで自分の容姿にあまり自信がなかった。

「まあ、アイシャ様はご自分のことがよく分かっているしやらないようですわ。あなた様はとても可憐で美しいですわ。もっとご自分に自信を持ってくださいませ」

「そ、そうなの？」

今までトウルティエール王宮で、母親にまったく似ていない不美人な娘と陰口を叩かれてきたので、アイシャはライサのその褒め言葉を信じられないことのように聞いていた。

「そうです。その灰桜色の髪や胡桃色の大きな瞳もとても魅力的ですわ。……それはそうと、早急に今夜の支度をする必要がありますね。今回は念入りにしましょう」

ライサにそう言われて、アイシャは食事を早々に切り上げ、初めてこの城で過ごす夜のように、湯殿で侍女達に気合いを入れられて支度された。

体中を念入りに洗われ、良い匂いの香油を全身に擦り込まれる。

そして、濡れた灰桜色の長い髪の水分を柔らかい綿織物で拭き取られると、丁寧に櫛けずられた。すると、アイシャのまっすぐな髪が光沢を持って更に美しく艶めいた。

そして、アイシャは寝間着を着せられると、寝室に押し込められた。

……これでは、まるで初夜のようなのである。

あの時はカルラートの訪れはなかったが、はたしてライサの期待通りに彼は現れるのだろうか。

——もう、このまま手を出されないと思っていたのに。

アイシャは寝台の端に腰掛けて、小さく溜息をついた。

その脳裏に浮かぶのはカルラートではなく、心に秘めた愛しい人。……決して優しくはしてくれない人の姿だった。

アイシャはそれを首を横に振って振り払う。

ライサの言うことが本当なら、わたしはもうあの方のことは忘れなければいけない。

過去の想いに囚われていては、先に進めないのだから——。

アイシャが寝間着の胸元をぎゅっと掴んで、叶わない想いの苦しさをこらえていると、やがて寝室にカルラートが現れた。

「アイシャ」

「……カルラート」

アイシャは彼の姿を見て、突然逃げ出したいような衝動に駆られて、寝台から立ち上がる。

そんなアイシャの腕をカルラートは素早くとると、彼女を抱きしめた。

「や……」

——怖い。

アイシャはカルラートの強い力に、今まで感じたことのないような不安と恐れを感じて身を震わせた。

そしてカルラートはアイシャを更に強い力で抱きしめると有無を言わせない言葉を発した。

「アイシャ、わたしはこれからそなたを抱く。覚悟しろ」

17 王妃

——とうとうこの時がきてしまった。

そうアイシヤは感じた。

カルラートが震えるアイシヤの頤をそっと持ち上げると、触れるだけの口づけをしてきた。

「アイシヤ……」

カルラートは何度も愛しそうにアイシヤに口づけを繰り返す。

アイシヤはあまりのその息苦しさに倒れそうになってしまい、カルラートに支えられた。

「……そなたは本当にこういうことに慣れていないんだな。あの噂はまったくの嘘だったということか」

ようやく彼の口づけから逃れられて、肩で大きく息をするアイシヤに、カルラートは苦笑した。

……あの噂とは、自分が兄王とただならぬ関係であるということだろうか。

カルラートにそれを言われたことでルドガーへの想いが蘇り、アイシヤは身を堅くする。

「アイシヤ、そう堅くなるな」

そう言って、カルラートはアイシヤを寝台に倒すともう一度、今度は深く口づけた。

「アイシヤ、愛している」

思ってもいなかったカルラートの告白に、アイシヤは瞳を見開いた。

——この結婚は政略以外の何物でもないと思っていたのに。

アイシヤが呆然と彼の顔を見ると、カルラートは苦笑した。

「信じられないという顔だな。……わたしもかの国のやり方には反発したが、そなた自身への想いには逆らえなかった」

「わ、わたしは……」

想い人のいるアイシャには、未だこの婚礼が政略以外のものとし
か受け入れられていない。

「そなたがこれを政略としか思っていないのは理解している。……
だが、その内にそなたのその思いが解ければと思っている」

「わたし、わたしは……っ」

アイシャはカルラートの気持ちをありがたく思いながらも自分に
想い人がいることが後ろめたく、それ以上言葉を発することが出来
なかった。

アイシャの心の内に秘めているのは、カルラートが反発している
人。

それでもいつか、カルラートに愛される内にあの方のことを忘れ
ることが出来るのだろうか――。

わたしがいなくなって清々すると言ったあの方に。

アイシャは諦めにも似た気持ちで体の力を抜き、カルラートに身
を任せる。

カルラートがそんなアイシャに口づけながらも、それを彼女の首
筋へ移動させていく。

「あ……っ」

途端に慣れない感覚が走り、アイシャは思わずびくりと体を震わ
せた。

カルラートはそんな彼女の寝間着を開くと、柔らかな膨らみへと
唇を移動させた。

「あっ、いや……っ」

もう片方の膨らみをカルラートに触れられて、アイシャは思わず
体を堅くしてしまう。

「アイシャ、そんなに堅くなるな」

カルラートが苦笑するが、初めての感覚にアイシャが思わずそう
なってしまうのは仕方のないことだと言えた。

カルラートは愛しげに何度も彼女に口づけを落としながら太腿へ
と指を伸ばした。

アイシャはその未知への感覚と恐怖から大きく体を震わせた。

「やああ……っ」

怖い、怖い、怖い。

——お願い、助けて。

カルラートに身につけたものをすべて取り去られたアイシャは、
恐怖から思わず口にしてしまう。

「いや……っ、助けて、陛下……っ」

その途端、カルラートは行為を止め、アイシャを厳しい顔で見つ
めた。

「……その陛下とは、わたしのことではないな。……ルドガーか」
思わぬ指摘に息をのんでしまったアイシャから、彼女の本当の気
持ちを知ったカルラートは怒りを露わにする。

「そうなんだな？ アイシャ、そなたが想っているのはあの男か」
そう言うと、今まで優しく触れていたカルラートの手つきが荒々
しくなる。

「や、やめて、カルラート……ッ」

「だが、そなたの夫はこのわたしだ。アイシャ、あの男のことは忘
れて、わたしのことを好きになれ」

そう言うと、カルラートは何度もアイシャの唇を奪う。

「あっ、やっ、やめ……っ」

全身をカルラートの手や唇が這い、その慣れない感覚にアイシャ
の体が痙攣する。

心に秘める人がいて、それを夫であるカルラートに指摘されなが
らも反応する体がとても恥ずかしく、アイシャは涙目になりながら、

彼に懇願する。

「や、やあ……っ。やめて……！」

あらぬところに口づけられてアイシャの体が何度も跳ねた。

襲ってくる耐えがたい感覚にアイシャはこらえきれず声をあげる。

アイシャは幾度もやめたと懇願するが、それでもカルラートは止まらなかった。

カルラートは宣言通りアイシャの弱い場所を責め立て、さんざん啼かせた。

「カルラート、もう、許して……っ」

耐えきれなくなったアイシャが泣きそうな声で懇願する。

しかし、その表情にはどこか陶然としたものが混じっていて、可憐なアイシャがそんな艶っぽい表情をしているのはひとえに自分のせいで、あの男のためではないということにカルラートは満足していた。

……だが、こんなアイシャを目の前にしては彼もさすがにもう限界だった。

カルラートはどこか焦点の合わない瞳のアイシャに口づけると、ゆっくりとその体に倒れ込んでいった。

アイシャがルドガーを愛しているということを知って少し心配したが、彼女はまごうことなき乙女だった。

ただ、それに対してその扱いは少々乱暴すぎたかもしれない。

既にぐったりとして意識のないアイシャに、カルラートは少し、いやかなりやりすぎたかと反省する。

しかし、アイシャも悪い。

夫である自分を差し置いて、他の男に助けを求めるなど、男にとつては屈辱以外の何物でもない。

それが、権力を笠に着るルドガーなどであればいらつきは尚更だ。聞けば、ルドガーはアイシャを憎んでいるという話ではないか。

そんな男に想いを寄せること自体が理解できない。

だが、いかにアイシャがルドガーに想いを寄せていようと、もう名実共に彼女はハーメイの王妃だ。今すぐは無理だとしても、自分が愛すうちに彼女の気持ちもちちらに向いてくるかもしれない。

それに、自分がアイシャと結ばれたことで、ルドガーも今後とかく言ってはこないだろう。

おかしな意地を張ってしまったことで少し延びてしまったが、これでようやく彼女と結ばれたのだ。

今考えると、トゥルティエールへの反発でアイシャに屈辱的な思いをさせていたのも、今となっては反省しきりだ。

しかし、やってしまったものはもう取り返しがつかないし、その分、アイシャを大切にすることで挽回していこうとカルラートは決意した。

――寝台にアイシャの真っ直ぐな灰桜色の髪が流れている。

カルラートはその一房を取って愛しげに口づける。

最初にアイシャに会った時は、確かに可憐で美しい姫だと思ったが、まさかここまで彼女に惚れ込むとは思わなかった。

出来れば、彼女もいつかは自分にそうなってほしいとカルラートは思った。

「アイシャ……」

珍しい色の美しい髪を撫でながら、カルラートはアイシャに口づける。

すると、アイシャが身じろぎした。

「ん……」

アイシャの白い裸身が悩ましげにうごめき、カルラートの目を奪った。

襲ってしまいたいのはやまやまだが、アイシャは純潔を失ったばかりだ。そうそう無理をさせるわけにもいかない。

……それだけでなく、その前にかなり無茶なことを強いたのだ。

カルラートは掛け布をアイシャにかけると、その白い魅力的な体を視界から遮った。

「あ……、わたし……」

目覚めたアイシャがカルラートの顔を見て一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに状況を理解したようだった。

「……わたし、この国の王妃になったのね……」

起きあがるのも辛いのだろう、アイシャは寝台に横になったままでしみじみとそう言う。

……どうやら、余程アイシャは自分に手を出されないと思いこんでいたらしい。

思い返してみれば、相当酷いことを言っていたし、アイシャのその反応は当然のことかもしれないかった。

「……ああ。今までのすまなかつたな、アイシャ。これからは王妃として出来るだけの待遇にするつもりだ」

カルラートがそう言うのと、アイシャは少し微笑んだ。

「……これで王妃の役目、果たせるかしら」

「ああ、そうしてもらわないと困るな」

なにしろ、カルラートはアイシャ以外の妃は娶らないつもりだ。彼女にはどうあっても、後継者を産んで貰わなければならない。

「……責任重大ね」

くすり、と笑ったアイシャのその顔がとても艶やかに見えて、カルラートは思わずどきりとする。

「……そうだな」

初めてだった彼女に無理をさせてはいけないと思うが、カルラートはまたアイシャが欲しくなってきた。

カルラートはアイシャの上に移動すると、口づけを落とした。

それは、やがて首筋から下へと移動していったが、今度は彼女は嫌がらなかった。

18 新婚

「アイシャ様、誠におめでとうございます。本当に喜ばしい日でございますわ」

アイシャが正式にカルラートの妃となった翌日。

ライサがうきうきと海綿を掴みながら満面の笑顔で言った。

「……ありがとう」

ライサに風呂に入れてもらいながら、アイシャは微笑んだ。

大国の王妹として、まずは第一段階だけでも到達したことに、アイシャは喜びを覚える。

しかし、まだこれはまだ最初の取っかかりだ。

これで安心はせずに、王妃らしく振る舞えるように、ハーメイの皆とも仲良くやっていこう。

アイシャは風呂から上がると、ライサやハーメイの侍女達に朝の支度に取りかかれた。

「共同の間で、既に陛下がお待ちですわ。朝食をご一緒しようということです」

それを聞いてアイシャは少しだけ焦る。

確かカルラートは朝一番から執務が入っていたはずだ。

「まあ、それならあまり待たせてはいけないわね」

アイシャは早々に朝の支度を終えて、王と王妃の共同の間に入った。

その卓上には既に朝食の用意がしてあって、その傍でカルラートが立って待っていた。

「カルラート、もしかしてかなり待たせてしまったかしら？ ごめんなさい」

アイシャが慌ててカルラートに頭を下げると、彼は首を振った。

「いや、それほど待っていない。……それにいきなり言い出したわ

たしも悪いしな」

「そんなこと……」

アイシャはそこまで言って言葉に詰まる。

……もしかして、昨夜の行為のことを気にかけてこんな席を設けてくれたのだろうか。そう思うと、アイシャは彼の気持ちがありがたく、ふわりと優しい気分になった。

二人が朝食の席に着くと、カルラートはアイシャのために料理を取り分け、それから彼女をしげしげと見つめた。

「な、なにかしら？」

おかしな格好はしていないはずだが、こうも見られると、昨夜のこともあり、アイシャはなんだか気恥ずかしくなってくる。

「いや、そなたとこうして向かい合って朝食を取っているのが、なにか不思議な気がしてな」

「そ、そう……？」

なにが不思議なのかよく分からなかったので、アイシャはそれだけ返した。

「ああ、本当にそなたがわたしのものになったのかと思って少し感慨深かった」

「そ……」

アイシャは、そこで初めてカルラートの言わんとすることが分かり、赤面した。

「可愛らしいな、アイシャ」

真っ赤になったアイシャを見て、カルラートが愛しそうにくすくす笑う。

「も、もう、からからわないで」

「からかってなどいないぞ。正直な感想を述べただけだ」

……それはなおさら悪いと思うのだけれども、気のせいだろうか
とアイシャはしばし悩む。

しかし、これでカルラート自身から正式に王妃と認められたのだ。
アイシャの気のせいかもしれないが、ハーメイの侍女も更に彼女

に親切になったようだ。

「そ、それはそうと、この後、あなたは執務なの？」

なんとかこの気恥ずかしい話題を変えようと、アイシャがカルラートに尋ねると、彼は少しつまらなそうにした。

「ああ、まあな。できればこの後、そなたと庭園でも巡りたかったが、オルグレンがうるさいので仕方ない」

幾分拗ねているようなカルラートが、少々笑いを誘う。

「庭園は逃げないし、わたしは侍女をつけて見て回るから大丈夫よ」
アイシャがくすくす笑いながら言うと、カルラートは少しばかり不満そうな顔をした。

「……そなたは冷たいな」

「え？」

冷たくした覚えはないのだが、そう受け取られてしまったのかと、アイシャは少し焦る。

「あのカルラート、わたしは別にあなたに冷たくしたわけじゃないわよ」

「……分かっている。わたしが勝手に拗ねているだけだ」

「拗ねているって、カルラート子供みたい」

思ってもいなかった彼の言葉に、アイシャは噴き出してしまった。
国王なのに、存外、彼は子供っぽいところがある。

「それだけ、そなたと一緒にいる時間が減るだろう。新婚だっていうのに、オルグレンはまったく配慮をしないんだからな」

そう言って深く溜息をついたカルラートの様子があまりにも切実に見えたので、アイシャは思わず言ってしまった。

「ま、まあ、昼間は無理でも夜ならいくらでも会えるじゃない」

「それはそうだな」

アイシャの意見で俄然元気を取り戻したカルラートは、笑顔になると勢いよく朝食を平らげだした。

「え……、カルラートどうしたの？」

今のアイシャの言葉で、カルラートの取ったその行動がよく分か

らず、アイシャは少し困惑する。

「執務を早く切り上げることが出来れば、それだけそなたと夜に一緒にいられるだろう？」

「そ、それはそうだけれど……」

……なにか、ものすごい勘違いをされていると思うのは気のせいだろうか？

もしかして、彼に誘っていると思われたら適わない。

それで、アイシャはそのカルラートの誤解を解こうと、恐る恐る言った。

「あの、わたしが言ったのは夜なら話せる機会があるってことなんだけれど」

遠慮がちのアイシャの言葉にも、カルラートは見事にそれを否定してくれた。

「つれないことをいうな。新婚で夜といえ、やることはひとつしかないだろう」

「そうじゃなくて、わたしはぜひ話し合いがしたいの！」

アイシャはそう主張したが、有無を言わせない笑顔でカルラートに言われた。

「遠慮するな、アイシャ」

「え、遠慮なんてしていない、けど……」

戸惑いがちのアイシャの言葉がカルラートに届くことはもちろんなかった。

かくして、その夜にカルラートは意気揚々として現れた。

そして、夜の夫婦の話し合いが事実上中止となったのは言うまでもない。

19 ルドガーの動揺

「——どうやら、アイシャ様とハーメイ国王は結ばれたようです」
ハーメイにやっていたライノスからの報告を聞いて、ルドガーは一瞬絶句した。

……とうとうこの日が来てしまった。

アイシャをハーメイに送り出した時に覚悟はしていたはずだが、カルラートに焦らされる真似をされていた分、驚愕は大きい。

「……そうか」

なんとかそれだけ言うと、ルドガーはライノスの報告を更に促した。

「ハーメイ国王はこの国に対する反発よりも、アイシャ様を選んだようです。その前にアイシャ様がハーメイ国王に妾妃を娶らないのかと尋ねられたことが今回のことに及んだ要因のようです」

「アイシャが……」

大国の姫として嫁した者が自ら妾妃の話題を出すなど、なんと気の毒なことだろう。

そんなことをするまで、アイシャは正妃としてあの国の行く末を憂えていたのだろうか。

お飾りの王妃として扱われていたというのに、アイシャは優しすぎる。

いやしかし、それもあるだろうが、そんな話題を出せるのは、アイシャがあつた男を愛していないからだろう。

元より政略なのだから、ルドガーにはそれが当たり前のよう思えた。

「どうやら、アイシャ様は絶対にハーメイ国王に手を出されないと
思われていたようですね。……それがどうやら、ハーメイ国王の逆

鱗に触れたらしいです」

「……そうか」

きつと、アイシャは無邪気にカルラートに妾妃の話をしたのだろう。それが、アイシャを憎からず思っていたやつに障ったということか。

時に無邪気な言葉は残酷な結果をもたらす。

今回は、アイシャの言葉がそれだ。

清らかだったアイシャはこれでとうとう純潔を失ってしまった。

それを思うとルドガーはやるせない気持ちになる。

こうなることが分かっているハーマイにやったというのに、いざとなったら感情が理性についていかなかった。

「……二人の夫婦仲はどうだ」

「とてもよろしいですよ。特にハーマイ国王の方がアイシャ様に夢中のように、あの国の宰相に執務の量をどうにかしろと掛け合っていました」

一時は初夜の寝所にも訪れなかったカルラートのあまりの変わりようがおかしらしく、ライノスは忍び笑いを漏らした。

「一国の王ともあろう者がどうにかしているな」

ルドガーも彼に同調するようにカルラートを嘲笑する。

……本当は、彼女の動向が気になって仕方がなく、ハーマイに嫁がせたことを悔やんでいる時点で、ルドガーも同じ穴の貉なのだが。

「……ところで、今アイシャはどうしている」

「アイシャ様は先程庭園におられました。追尾してみましたか」
ライノスはそう言うと、他人の魔力を辿る能力を使った。

この能力は優秀な魔術師でも扱えるものが少ない。

その稀少さ故、ライノスはアイシャが嫁いだハーマイの密偵になったのだが、真実はルドガー以外知らなかった。

しばらく空中に庭園の花々が見えたかと思うと、ライサやハーメイの侍女に伴われたアイシャの姿が映しだされた。

美しい灰桜色の髪をなびかせて微笑む姿は、普段彼女に冷たく当たっていたルドガーには絶対に見せないもので、彼は無意識に胸元を掴んでいた。

微笑むアイシャは相変わらず可憐ではあったが、それでも以前とは違い、どこか艶やかだった。

アイシャ……、おまえがそんなふうになくなったのは、あの男のためか？

ふいにカルラートに対する嫉妬がわき起こり、それを抑えるために、ルドガーは痛いほど両手を握りしめた。

これからアイシャがカルラートを愛してしまう可能性は否定できない。

政略とはいえ、カルラートは秀麗な容姿で、そして今は彼女に夢中だというのだから。

『アイシャ、ここにいたのか』

そんな時に恋敵が現れて、ルドガーは思わず顔を歪ませた。

『カルラート？ 執務はどうしたの？』

驚いたように聞いたアイシャの体をカルラートは迷いもなく抱き寄せる。

『オルグレンに任せてきた』

『もう、後で大変になっても知らないから』

困ったように眉を下げて言うアイシャにカルラートはやや不満そうに呟いた。

『そなたはつれないな。わたしはこんなにそなたに会いたいというのに』

『……毎日会えるじゃない』

カルラートに抱きしめられながら、困ったようにアイシャが言った。

『それはそうだが、夜以外にもそなたに会いたい』

言外にアイシャを抱いていることを匂わせて、そしてカルラートは彼女にそっと口づける。

「……もうやめろ！」

ルドガーが執務機の報告書を手で無理矢理払ったため、数枚の紙が舞い落ちる。

驚いたライノスがハーメイの映像を送るのをやめたため、トゥルティエール王の執務室は元の静寂に包まれた。

「陛下……、あなた様はアイシャ様を……」

ただならぬルドガーの様子に、ライノスが氣遣わしげに彼を見にくる。

この男にはいつか自分の気持ちを知られてしまうかもしれないと思っていたが、それは今この時でも仕方がないとルドガーには思えた。

このライノスは使える男だ。それ故、最大限に活躍してもらわねばならない。

ルドガーは魔術師の名を呼ぶと、更に新たな任務を彼に言い渡した。

20 カルラートの願い

それから二週間ほど、穏やかな日々が流れた。

「アイシャ」

カルラートは、時々ふざけているかのようにアイシャを後ろから抱きすくめる。

ただ、それは決してアイシャをからかうためではなく、一時でも彼女と一緒にいたいという、カルラートの意思表示だった。

「……早くそなたがわたしの子を宿してくれるといいのだがな」

カルラートは未だにアイシャがルドガーのことを愛していることを重々承知している。

それは、彼が彼女に愛の言葉を囁く度に、アイシャの目がそれから逃げるようにさまようのがその証拠だった。

——だが、アイシャに我が子さえ出来れば、彼女の気持ちもこちらに向かわずにはいられないだろうと、カルラートは踏んでいた。

「アイシャ、早くわたしの子を産め」

そう言うと、彼女は頬を染めて「ええ」と頷く。

たとえそれが王妃としての義務で答えたのだとしても、カルラートは構わなかった。

子さえ成してしまえばなんとかなる。

そうカルラートは思っていたのである。

——しかし、である。

彼の考えは一通の書簡によって破られた。

「——ふざけるな！」

カルラートはトゥルティエールからの書簡に目を通すと、叫びながらそれを投げつけた。

「陛下……？ どうされました」

宰相のオルグレンがカルラートのただならぬ様子に、若干不安そうに尋ねてきた。

「……あの王は、アイシャをトゥルティエールに戻せと言ってきた。そんな馬鹿げたことができるか」

「アイシャ様を……」

さすがにオルグレンにもこれは予想不可能だったらしく、息をのんだ。

「一度他国の妃にした姫を戻すなど、前代未聞です。……これが、陛下とアイシャ様が寢所を共にしていない時でしたらまだ話は分かりますが、なぜ落ち着かれた今になって……」

オルグレンがしきりに首を捻る横で、カルラートは不快も露わに、トゥルティエールからの書簡の返事を書き殴った。

カルラートはそれをオルグレンに無造作に渡すと、トゥルティエールに送っておけと命じた。

そして、カルラートは席を立つ。

「——アイシャに会ってくる」

普段ならば、さぼらないでくださいぐらいは言うオルグレンだが、この時だけはさすがに止めなかった。

「……カルラート？ どうしたの？」

不機嫌な様子でいきなり現れたカルラートに、アイシャは驚いたようだった。

——アイシヤにこんな不快そうな顔で会うのはまずい。なるべく普段通りにしていないと。

……そうは思うが、かの国に愛しいアイシヤを奪われるかもしれないと思うと、気が気ではない。

カルラートはアイシヤを抱きしめると、その唇を無理矢理奪った。
「ん……っ、カルラ……ト」

何度も角度を変えてアイシヤの柔らかな唇を貪ると、カルラートはその間から舌を侵入させた。

「ん、あ……っ」

口腔内をまさぐり、逃げる舌を絡めとると腕の中のアイシヤがびくりと震える。

やがてカルラートが唇を離れた頃には、既にアイシヤは立っていられなくなっていた。

カルラートはそんな彼女の膝裏をさらうと、寝室へと向かう。

「……しばらく邪魔はするな」

「か、かしこまりました」

カルラートが釘を釘を刺すと、アイシヤの傍にいた若い侍女達は顔を赤くして頷いた。

「……カル、ラート？」

寝台の上に降ろされたアイシヤは真っ赤な顔でカルラートを見つめた。

彼にこんなふうな性急に求められるのか分らないというような顔をしている。

きっと、アイシヤには祖国に戻れとは伝えられていないのだろう。彼女はただただ戸惑う様子を見せてくる。

「アイシヤ、そなたが欲しい」

「こんな明るいうちから、駄目、恥ずかしい……」

カルラートから視線を逸らすと、アイシヤは赤くなった顔を隠し、

軽い拒絶の言葉を口にする。

そんな愛らしい様子でさえ、カルラートを誘い、いっそう彼女への愛しさは増した。

——たとえば、大国相手でも渡すものか。

カルラートはそう決意すると、アイシャに口づけ、次第にその体へ溺れていった。

「カルラート、なにかあったの？　いきなりこんなこと、おかしいわ」

事が済んで、愛しそうにカルラートから瞼や頬を口づけられていたアイシャが少し戸惑った様子で尋ねた。

……だが、アイシャに彼が激情に走った原因を言うわけにはいかなかったカルラートはただ首を横に振った。

「別がない。ただ、急にそなたが欲しくなっただけだ」

「……そうなの？　あなたとこうしていて、宰相が黙っているとも思えないのだけど……」

気遣うように、アイシャが控えめに言ってくる。

その様子さえ、カルラートにはとても可憐で愛おしく思えた。

「オルグレンにはアイシャと過ごすと話は通してある。後でやつに文句を言われることもない」

そのことは事実だったので、カルラートは率直に述べた。

すると、アイシャは少し安心したらしく、ほっと息をつく。

「……よかった。あなたが少し不機嫌そうだったから、わたしはてっきりよからぬことでもあったのかと思ったわ」

「……そう見えたか？」

「ええ」

アイシャが心配するほど自分是不機嫌に見えたのかと、カルラートは少し反省する。

アイシャにはかの国から戻せと言われていたことは絶対に悟られてはならないのだ。

「わたしはそなたが愛しくてたまらないのだ。それなのに会う機会が少ないからつい不機嫌になってしまった。よけいな心配をかけてすまなかったな、アイシャ」

カルラートが微笑みながらそう言うと、アイシャが頬を染めて首を横に振った。

「そんなこと……」

明るいうちの行為に恥ずかしそうにしているアイシャの唇にカルラートは口づけ、愛を囁く。

「……愛している、アイシャ」

「カルラート……」

——子さえいれば、それを理由にかの国の要求を拒めたものを。

しかし、それを言っても詮ないことだ。

カルラートはアイシャの白い裸身を抱きしめ、所有の印をつけながら、どうやったら彼女を己のものにしておけるだろうと、一人考えを巡らせていた。

それからしばらくして、カルラートは名残惜しそうにアイシャに口づけを落として、また執務に戻っていった。

アイシャは行為の後のけだるい体を湯船に沈めて溜息をつく。

「それにしましても、とても陛下に愛されておいですわね、アイシャ様。傍から拝見してとても素敵でしたわ」

「あ、ありがとう」

侍女達に夢見るように溜息をつかれて言われ、アイシャは赤くな

りながらも礼を言う。

確かに最初の頃と比べたら、カルラートのアイシャに対する態度は雲泥の差だ。

それでも、先程の行為は性急すぎたと思う。

……普段なら、抱きしめたり、口づけたりはしてくるが、夜以外はあくまでもそれ止まりだ。

——本当になにもなかったのかしら。

カルラートはなにもないと言ってはいたが、明らかに様子がおかしかった。

宰相のオルグレンに探りを入れたらどうかとは思ったが、王であるカルラートがしないものをまず話すことはないだろう。

アイシャは溜息をもう一度つくど、そのことについては深く考えないことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649ba/>

恋詠花

2012年1月14日20時58分発行